高槻市文化財年報

平成10年度

Ⅰ 埋蔵文化財の調査 …… 1

1　平成10年度の調査

2　調査の概要

高槻城三の丸跡キリシタン墓の調査　宮崎　康雄

高橋　公一

嶋上郡衙跡（23－D地区他）の調査　木曽　広

津之江南遺跡（98－C地区）の調査　宮崎　康雄

今城塚古墳第2次規模確認調査　高橋　公一

Ⅱ 文化財保護啓発事業 …… 22

Ⅲ 指定文化財 …… 26

Ⅳ 資料紹介 …… 28

安満遺跡98－A地区出土の土器　宮崎　康雄

2000年2月

高槻市教育委員会

高槻市文化財年報

平成10年度

Ⅰ　埋蔵文化財の調査

1　平成10年度の調査

平成10年度における土木工事における埋蔵文化財調査届出・通知件数は、繰り越し分を含めて101件で、このうち発掘調査件数は81件にとどまり、昨年よりもおよそ20件減少している。

これらを届出別にみると、個人住宅の新築・増築が35件で最も多い。そして社会基盤整備に伴う公共事業である上下水道の整備の10件がつづく。一方、共同住宅、駐車場・倉庫はいずれも4件、造成工事は6件と、平成9年度からの横這いの傾向がみられる（表1）。

遺跡別では、嶋上郡衙跡と高槻城跡がともに16件で最も多い。このうち嶋上郡衙跡は過去5年間で最少であり、減少傾向がみられるのに対し、平成8年度までは一桁台であった高槻城跡は9年度に16件と飛躍的に増加し今年も高い数値を保っている。また、中城遺跡でも住宅の建て替えに伴う調査が6件実施されており、住宅地における建て替えの増加傾向が調査件数に反映されている（表2）。そのほか神内遺跡では、区画整理事業に伴う事前調査がおこなわれ、遺跡の実態にせまる成果をあげつつある。各々の調査概略については、一覧表にまとめた（表3）。

表1　平成10年度　届出別調査件数

個人住宅	共同住宅	駐車場・倉庫等	造成工事等	道路・水路改修	上下水道整備	その他	計
35	4	4	6	3	10	19	81

表2　平成10年度　遺跡別調査件数

遺跡名	件数	遺跡名	件数	遺跡名	件数
嶋上郡衙跡	16	天川遺跡	1	土室遺跡	1
宮之川原遺跡	3	安満遺跡	5	新池遺跡	2
塚脇古墳群	1	梶原寺跡	1	今城塚古墳	3
大蔵司遺跡	1	神内遺跡	3	郡家今城遺跡	4
芥川遺跡	4	郡家本町遺跡	1	津之江南遺跡	4
天神山遺跡	2	郡家車塚古墳	1	中城遺跡	6
上田部遺跡	2	氷室遺跡	1	田能南遺跡	1
高槻城跡	16	氷室塚古墳	2	計	81

No.	遺跡名(地区)	所　在　地	届　出　者	用　途	面積(㎡)
1	嶋上郡衙跡(76−I·J)	川西町一丁目1027−1	寺本　武史	露天駐車場	1030
2	〃(74−G)	郡家新町156−37	平野　和子	個人住宅	54.1
3	〃(21−D)	郡家本町521−1、522−1	安井合繊(株)	工場建設	1143.55
4	〃(48−B)	川西町一丁目956−12	横山　正毅	個人住宅	53.46
5	〃(23−M)	郡家新町500他	大阪府水道企業管理者	ポンプ場施設	2500
6	〃(28−L)	清福寺町829−5	岡本　昭子·利花	個人住宅	156.31
7	〃(37−L)	清福寺町982−3	高槻市長	フェンス	
8	〃(54−E)	郡家新町350−7	宮垣　圭一·雪恵	個人住宅	104.59
9	〃(28−C·G)	清福寺町839·840·1484	山本　和男	個人住宅	76.5
10	〃(15−N)	郡家新町地内	高槻市水道部	水道	11.25
11	〃(95−E)	今城町187−17	表谷　浩一	個人住宅	48.27
12	〃(23−D,24−A)	郡家新町336−1·337−1	久保田直次郎	病院	1000
13	〃(23−D)	郡家新町338−1	下村　治郎	駐車場	419
14	〃(37−L)	清福寺町982−3	高槻市長	舗装	232
15	〃(74−C)	郡家新町156−4	長岡　勇治	個人住宅	50.74
16	〃(13−P,14−M)	郡家新町337−3·336−2·335−1	久保田直次郎	駐車場	1000
17	宮之川原(98−A)	宮之川原本町他	高槻市下水道部	下水道	420
18	〃(98−1)	宮之川原五丁目505−7	今枝　吾郎	個人住宅	90.78
19	〃(98−2)	宮之川原五丁目509−4·5	武知　辰也	個人住宅	132.5
20	塚脇古墳群(98−A)	塚脇一丁目地内	高槻市下水道部	下水道	520
21	大蔵司遺跡(98−A)	大蔵司二丁目地内	高槻市下水道部	下水道	100
22	芥川遺跡(98−1)	真上町一丁目60−1·5	奥村　治男	個人住宅	492.31
23	〃(98−A)	紫町35−21	八千代産業株式会社	事務所	1500
24	〃(98−B)	紫町35−20	高槻市公園緑政課	公園	1692.64
25	〃(98−C)	紫町地内	高槻市道路課	道路改良	3417.6
26	天神山遺跡(98−A)	天神町一丁目10−96·97	広島総合銀行	共同住宅	2370.41
27	〃(98−B)	天神町一丁目10−85	(株)マツバラ	宅地造成	1689
28	上田部遺跡(98−A)	桃園町地内·城北町地内	日本電信電話(株)	電話設備埋設	77.53
29	〃(98−B)	桃園町554−2·城北町493−4他	関西電力(株)	電線路埋設	49.13
30	高槻城跡(98−A)	大手町1499−2	小阪　元章	共同住宅	748.05
31	〃(98−1)	野見町1244−10	藤井　紘	個人住宅	49.59
32	〃(98−B)	大手町1491−1	高槻商工会議所	会議所庁舎	805.65
33	〃(98−2)	出丸町1233−4·6	奥野　善久	個人住宅	143.53
34	〃(98−3)	出丸町1247	山本　典正	個人住宅	121.23
35	〃(98−4)	出丸町992−53	田北　圭一	個人住宅	102.47
36	〃(98−C)	城内町3	高槻市水道部	井戸掘削	3
37	〃(98−D)	野見町434−3	河本　襄二	住宅兼事務所	162.88
38	〃(98−5)	出丸町992−52	荒木　尚実	個人住宅	100.01
39	〃(98−E)	大手町279−1·2	山口　徹修	寺院増築	74.43
40	〃(98−6)	出丸町992−51	前川　佳司	個人住宅	100.01
41	〃(98−F)	出丸町4−68	奥野　善久	福祉施設	2175.58
42	〃(98−G)	城内町3	高槻市水道部	水道管埋設	203
43	〃(98−H)	大手町1192−12	高槻市街路課	道路改良	384
44	〃(98−I)	八幡町他地先	高槻市街路課	道路改良	2291.04
45	〃(98−J)	出丸町1233−3·5	川口　政幸	個人住宅	139.71
46	天川遺跡(98−A)	須賀町268−1他	大澤　嘉夫	分譲住宅	2523
47	安満遺跡(98−A)	八丁畷町410	米澤操·郁子	農作業小屋	
48	〃(98−B)	高垣町283−3	大江建設	宅地造成	418
49	〃(98−C)	八丁畷町230−3他	高槻市教育委員会	フェンス改修	
50	〃(98−D)	八丁畷町226−4	関西電力株式会社	フェンス改修	
51	〃(98−E)	八丁畷町270−1	高槻市総務部	看板設置	

表3　平成10年度調査一覧表(1)

担　当	調査機関	調査内容
橋　本	10.4.16･17	地表下1.3mで地山(黄褐色粘土)確認　遺構･遺物無し
橋　本	10.6.15	地表下0.9mで地山(黄褐色砂質土)確認※
宮　崎	10.7.13	地表下1.8mで地山(黄灰色砂)確認※
木　曽	10.7.6	地表下1.4mで地山(暗黄褐色土)確認　遺構･遺物無し※
木　曽	10.8.5～27	地表下3.0mで撹乱土確認　遺構･遺物無し
橋　本	10.8.31～9.7	地表下0.95mで地山(黄灰色土)確認　遺構･遺物無し※
橋　本	10.10.1	史跡現状変更　地表下0.5mの掘削で遺構面に達せず
宮　崎	10.10.22	地表下1.2mで地山(黄灰色粘土)確認　遺構･遺物無し※
橋　本	10.11.4～13	地表下0.8mで地山(黄灰色土)確認　遺構･遺物無し※
木　曽	10.11.5～11.30	既存管の撹乱のため遺構･遺物確認できず
橋　本	10.11.6～10	地表下1.55mで地山(青灰色砂質土)確認　遺構･遺物無し※
橋　本	10.11.25～12.25	本書掲載
橋　本	10.11.26～12.10	本書掲載
橋　本	10.12.7	史跡現状変更　掘削せず
宮　崎	10.12.14～28	地表下0.8mで地山(黄褐色粘土)確認　遺構･遺物無し※
橋　本	11.1.5～2.3	本書掲載
木　曽	10.5.1～11.2.26	地表下1.7mまで撹乱を確認　遺構･遺物無し
宮　崎	10.6.22	地表下0.9mで包含層(暗褐色土:0.3m)確認　地山は淡黄灰色砂　土師器出土※
宮　崎	10.5.11	地表下0.9mで包含層(暗褐色土:0.25m)確認　地山は暗黄灰色土　土師器･須恵器出土※
宮　崎	10.11.4～11.3.31	地表下1.5mで地山(黄褐色土)確認　遺構･遺物無し
橋　本	10.12.1～3.31	地表下1.0mで地山(暗褐色砂質土)確認　遺構･遺物無し
難　波	10.6.26	地表下1.25mで地山(青灰色粘質土)確認　弥生土器出土※
橋　本	10.7.22	地表下3.0mで撹乱土確認　遺構･遺物無し
橋　本	10.11.27	地表下1.0mで撹乱土確認　遺構･遺物無し
橋　本	10.12.14	地表下1.0mで地山(青灰色砂礫)確認　遺構･遺物無し
木　曽	10.6.18	地表下0.6mで地山(黄褐色粘土)確認　遺構･遺物無し
木　曽	10.7.1	地表下1.0mで地山(黄褐色礫土)確認　遺構･遺物無し
橋　本	10.4.13	地表下1.0mで地山(青灰色粘質土)確認　遺構･遺物無し
橋　本	10.4.28	地表下1.0mで地山(青灰色粘質土)確認　遺構･遺物無し
高　橋	10.5.14～6.17	本書掲載
橋　本	10.7.24	地表下0.7mで青灰色粘土の堆積土確認　遺構･遺物無し※
宮　崎	10.7.27～8.28	本書掲載
木　曽	10.8.11	地表下2.2mで地山(暗黄褐色砂礫)確認　遺構･遺物無し※
橋　本	10.8.21	地表下0.9mで灰色砂質土確認　出丸の地盤か※
難　波	10.9.8	盛土2.1m確認　遺構･遺物無し※
木　曽	10.9.14	地表下1.3mで地山(暗黄褐色土)確認　遺構･遺物無し
木　曽	10.9.16	地表下1.0mで外堀埋土上面を確認　湧水激しく遺物無し
橋　本	10.10.30	地表下0.85mで黄灰色粘土確認　遺構･遺物無し※
橋　本	10.11.2	地表下0.8mで地山(暗青褐色砂礫)確認　遺構･遺物無し
宮　崎	10.11.25	地表下0.5mで近世の地山(暗黄灰色土)確認　遺構･遺物無し※
橋　本	10.11.25･26	地表下2.0mで堀底に達せず　遺構･遺物無し
橋　本	11.1.11～29	地表下0.5mで地山(暗黄褐色土)確認　遺構･遺物無し
宮　崎	11.2.1～3.15	地表下1.8mで地山(黄褐色土)確認　遺構･遺物無し
橋　本	11.2.1～3.31	地表下1.0mで地山(暗黄褐色土)確認　遺構･遺物無し
高　橋	11.3.15	地表下0.8mで出丸の地盤(灰褐色砂質土)確認　遺物無し
木　曽	10.4.23	地表下1.5mで地山(青灰褐色粘土)確認　遺構･遺物無し
橋　本	10.4.7	史跡現状変更　掘削せず
宮　崎	10.6.24～7.10	本書掲載
橋　本	10.10.12	史跡現状変更　耕土(0.6m)の掘削のみで遺構面に達せず
橋　本	10.10.21	史跡現状変更　耕土(0.4m)の掘削のみで遺構面に達せず
橋　本	11.1.13	史跡現状変更　耕土(0.5m)の掘削のみで遺構面に達せず

No.	遺跡名(地区)	所　在　地	届　出　者	用　途	面積(m²)
52	梶原寺(98−A)	梶原一丁目255	梶村　市郎	個人住宅	985.24
53	神内遺跡(98−A)	上牧北駅前町1218−18	肥後　義章	個人住宅	90.77
54	〃(98−1)	上牧北駅前町1218−136	池田　敬子	個人住宅	192.5
55	〃(98−B)	神内二丁目地内	阪急上牧駅北土地区画整理組合	土地区画整理	2400
56	郡家本町遺跡(98−A)	郡家本町1564−2	野々垣　正義・啓子	個人住宅	328.06
57	郡家車塚古墳(98−1)	岡本町790	下村　治郎	個人住宅	221
58	氷室遺跡(98−A)	氷室町二丁目地内	高槻市下水道部	下水道	491.4
59	氷室塚古墳(98−A)	氷室町二丁目23−5·50−1	高槻市下水道部	下水道	678.6
60	〃(98−1)	氷室町二丁目587−6	大上　武	個人住宅	81.14
61	土室遺跡(98−1)	上土室六丁目131−49	瀧元　清文	個人住宅	91.26
62	新池遺跡(98−A)	上土室一丁目513−1·515−2	吉岡産業(株)	宅地造成	319.26
63	〃(98−B)	上土室一丁目	高槻市教育委員会	階段設置	
64	今城塚古墳(98−1)	郡家新町659−2	今井　秀子	個人住宅	530
65	〃(第2次)	郡家新町686−1他	高槻市教育委員会	規模確認·基礎調査	195
66	〃(98−A)	郡家新町25	高槻市下水道部	下水道	129.1
67	郡家今城遺跡(98−1)	郡家新町141−1	土田　光恵	個人住宅	149
68	〃(98−A)	今城町地内	高槻市下水道部	下水道部	118
69	〃(98−2)	氷室町一丁目781−21	高木　善吉	個人住宅	116.04
70	〃(98−3)	氷室町一丁目769−13	大貫　智康	個人住宅	121.87
71	津之江南遺跡(98−A)	津之江北町213−1·214−1	山川　幸雄	共同住宅	925.45
72	〃(98−1)	津之江北町256	奥田　春雄	個人住宅	300
73	〃(98−B)	津之江北町254·255·257	ヤマモトハウジング(株)	宅地造成	2194
74	〃(98−C)	津之江北町225−1	ヤマモトハウジング(株)	宅地造成	1200
75	中城遺跡(98−A)	昭和台町二丁目142−2	重永　敏行	個人住宅	148.69
76	〃(98−1)	昭和台町二丁目135	水上　敏	個人住宅	305.03
77	〃(98−2)	昭和台町二丁目128	鈴木　力	個人住宅	225.3
78	〃(98−3)	昭和台町二丁目156−2	高畑　廣・和子	個人住宅	163.37
79	〃(98−4)	昭和台町二丁目122−2	日高　保	個人住宅	133.47
80	〃(98−5)	昭和台町二丁目122−1	喜島　孝博	個人住宅	124.47
81	田能南遺跡(98−A)	大字田能小字岡崎6	高槻市建設部	小学校体育館	4588

※は高槻市文化財調査概要ＸＸＶ「嶋上遺跡群23」に掲載

表3　平成10年度調査一覧表(2)

担　当	調査機関	調査内容
鐘ヶ江	11.3.1～3	地表下0.5mで中世包含層確認　厚さ0.1m　瓦器片少量出土・遺構無し
木　曽	10.4.6	地表下1.5mで地山（灰褐色粘土）確認　遺構・遺物無し
宮　崎	10.11.19～12.11	地表下1.9mで地山（暗青灰色砂質土）確認　遺構・遺物無し※
橋　本	11.2.22～	方形周溝墓・環濠屋敷（中世）等検出
宮　崎	11.2.5	地表下1.8mで地山（暗灰色砂礫）確認　遺構・遺物無し
鐘ヶ江	10.9.16～30	後円部周濠に位置するが土石流のため周濠流出※
高　橋	10.7.13～11.3.31	地表下0.8mで地山（黄灰色粘質土）確認　遺構・遺物無し
宮　崎	10.12.1～11.3.31	地表下1.0mで地山（暗黄褐色粘質土）確認　遺構・遺物無し
宮　崎	11.1.18～21	地表下1.0mで地山（暗黄褐色粘質土）確認　遺構・遺物無し※
鐘ヶ江	11.1.8	地表下2.45mで地山（淡青灰色粘土）確認　遺構・遺物無し※
難　波	10.10.12～13	地表下0.2mで地山（橙色混灰色粘質土）確認　遺構・遺物無し※
鐘ヶ江	11.3.25	史跡現状変更　掘削せず
宮　崎	10.6.1～2	地表下0.2mで地山（黄灰色粘質土）確認　遺構・遺物無し※
高　橋	10.10.12～11.2.4	史跡現状変更　本書掲載
橋　本	10.11.2～2.26	地表下1.0mで地山（黄灰色粘土）確認　遺構・遺物無し
高　橋	10.7.1～10	9世紀代の掘立柱建物2棟、土坑等検出　土師器・須恵器出土※
高　橋	10.9.10～11.2.2	地表下0.6mで地山（黄白色粘質土）確認　遺構・遺物無し
橋　本	10.10.12～23	地表下1.3mで地山（黄灰色粘土）確認　遺構・遺物無し※
宮　崎	11.1.11～14	地表下1.5mで地山（黄灰色土）確認　遺構・遺物無し※
橋　本	10.5.20～26	地表下2.0mで包含層（青灰色砂礫）確認　弥生土器片出土　遺構無し
鐘ヶ江	10.6.24～8.7	律令期の大形建物・柵、中世の溝・井戸検出※
鐘ヶ江	10.6.24～7.24	方形周溝墓群、律令期建物2棟、中世井戸・溝多数検出
宮　崎	11.2.15～3.2	本書掲載
木　曽	10.4.13	地表下1.1mで地山（黄褐色粘土）確認　遺構・遺物無し
木　曽	10.6.26	地表下0.8mで地山（黄褐色粘土）確認　遺構・遺物無し※
木　曽	10.7.22	地表下0.6mで地山（黄灰褐色粘土）確認　遺構・遺物無し※
木　曽	10.8.24～8.28	地表下0.45mで地山（黄褐色礫土）確認　遺構・遺物無し※
木　曽	10.11.2	地表下0.2mで地山（暗黄褐色粘土）確認　遺構・遺物無し※
木　曽	10.11.11～18	地表下0.2mで地山（暗黄褐色粘土）確認　遺構・遺物無し※
高　橋	10.6.29	地表下3.4mで地山（淡灰色砂質土）確認　遺構・遺物無し100

2　調査の概要

高槻城三の丸跡キリシタン墓の調査

宮　崎　康　雄
高　橋　公　一

高槻城は、沖積地の高まりを利用して築城された平城である。現在は町割りに残る濠の痕跡などから往事を偲ぶのみだが、数次にわたる発掘調査により、近世高槻城の実態が明らかになってきた。しかし、中世高槻城については未だ不明な点が多く、外国人宣教師らが残した豊富な史料とは裏腹に、考古学的資料の僅少さが際だつ感が否めなかった

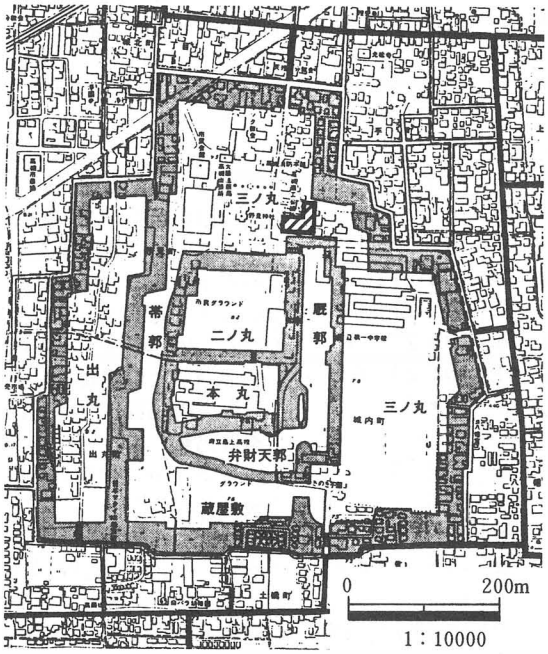


図1　調査位置図

ところが今回、三の丸北郭地区の調査で16世紀後半の木棺墓群を検出し、そのうちの一基（11号木棺）の蓋に十字架が墨書されていたことから、これらの木棺墓は高槻城主として著名なキリシタン大名高山右近に関わるキリシタンの墓地であることが明らかとなった。さらに、その後の整理作業により、2基の木棺から宗教具であるロザリオが発見されるにおよび、高山右近父子によるキリスト教布教の実態を直接うかがうことのできる貴重な遺構・遺物として注目される。

調査は、高槻市大手町1499-2（平成10年5月14日～6月17日調査、A区）と、1491-1（平成10年7月28日～8月28日調査、B区）にわかれるが、以下あわせて調査の概略を報告する。

遺構・遺物（図版第1～5）

〈木棺墓群〉

検出した遺構は、木棺墓29基、区画溝等である。これらの遺構は、厚さ1.8～2.1mの大規模な盛土の下層の淡青褐色粘質土上面で検出した。

木棺墓は、墓壙に木棺を直葬するもので、A区中央の通路をはさんで北群と南群にわかれる。棺の長軸を南北にとり市松状に規則的に配置している。木棺墓群の西側（B区）では、

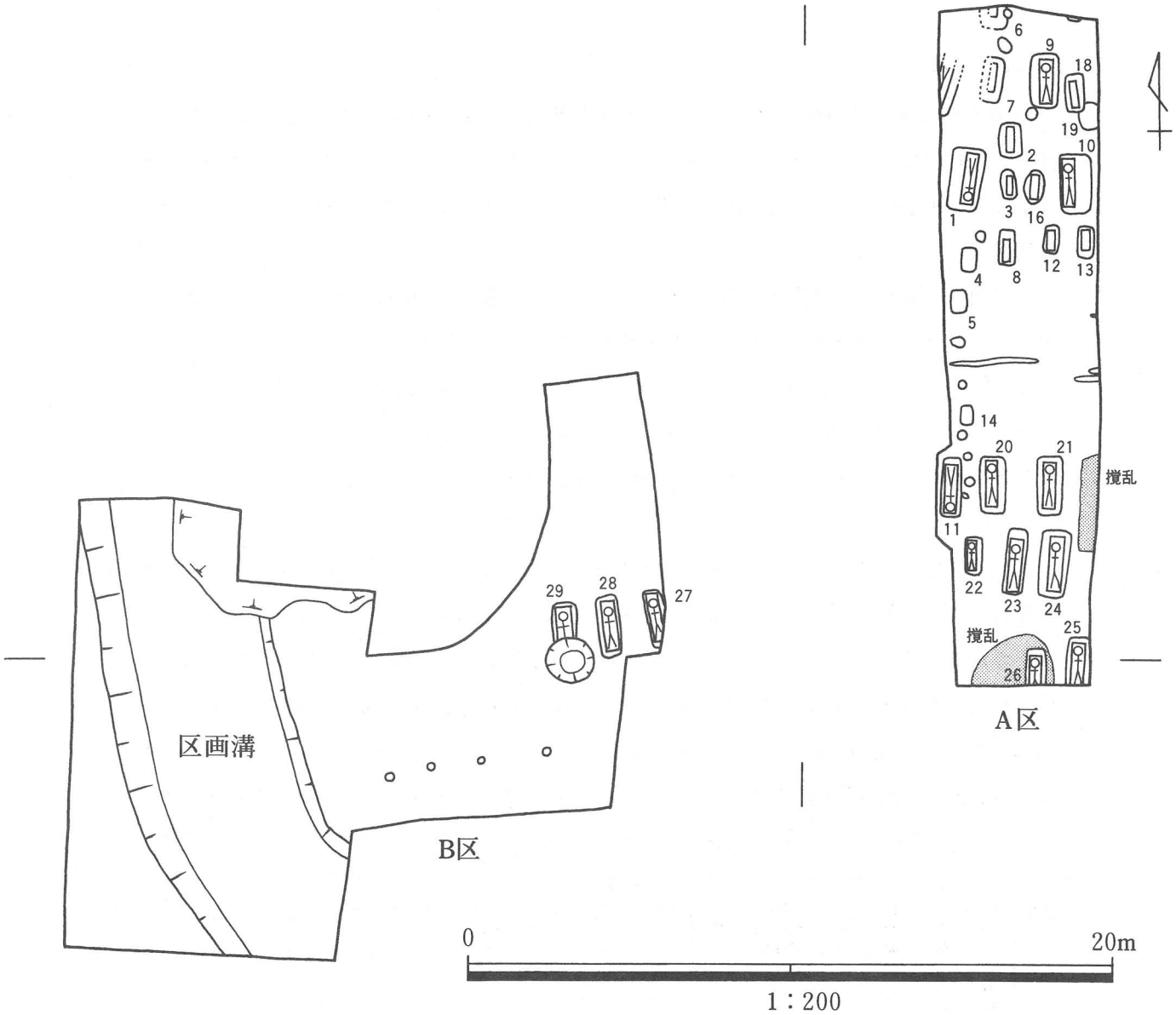


図 2　遺構概略図

墓地を区画する南北溝を検出している。この区画溝は、南部で東側に弧状に曲がっていることから、当該地区が墓地全体の西南隅部であると推定できる。区画溝の最大幅は5.5 m、深さ 1.5m を測る。

木棺は、長さ 1.6m 程度のものと 1m 前後のものに大別できる（表 1 参照）。大半のものは、鋸目の残る厚さ 1.0 ～ 2.0cm の板材を用い、鉄釘で打ち留めて箱形にしつられていたが、梯子状の桟で底板の代用とする 21 号や、底板の縦半分に竹棒を使用した 25 号など、特異な形状のものもみられる。また、棺の幅が 30 ～ 40cm 程度と狭く、つくりは粗末である。検出した 29 基のうち、14 基については人骨が残存しており、性別、年齢等が判明している。また、長さ 1m 前後の小形の木棺からは子供の人骨や乳歯が出土している。

〈11号木棺〉

11号木棺はA区西壁際で検出した。木棺の規模は、長さ164cm、幅46cm、高さ25cmを測り、棺材の厚みは2cm程度で、他の木棺に比して横幅が大きく、頑丈な作りである。内部には仰臥伸展の熟年男性が、南枕で葬られており、人骨もほぼ完全に残存している。副葬品等は検出していない。

十字架は、棺蓋上面の南端から約15cmのところに、遺体の顔の真上に正体する位置に墨書している。この十字架は一般的な十字の上にさらに短い横棒を配する「二支十字」であり、さらに右下に墨点を加えている。この「二支十字」の短い横棒は、通常の十字架の上部に打ちつけられた「INRI」(ユダヤの王、ナザレのイエス)と記した板を写したものといわれる。縦棒の長さは10cm、長い横棒は8cm、短い横棒は2.5cmである。

〈ロザリオ〉

人骨清掃作業中の10号木棺と24号木棺から、数珠状に玉を連ねた宗教具であるロザリオを発見した。ロザリオは木製で、ほぼ球形の小玉と大玉の他、ひょうたん形をした変形玉で構成されている。玉をつづっていた紐は朽ちていて検出できなかった。このうち、10号木棺の小玉は直径4～5mm、厚さ3～4mm、大玉は直径8mm、厚さ6mm、変形玉は長さ6～8mm、幅4～6mmを測り、いずれも紐孔の直径は約0.8mmである。全体として小玉約90個、大玉2個、変形玉3個を確認している。これらは人骨(女性)の右手首の周辺から出土しており、なかには3つ連接した状態のものもあった。こうした状況から、小玉は一環の連

		墓壙(cm)		木棺(cm)		人骨								
木棺No		長さ	幅	長さ	幅	骨格	埋葬状態	頭位	年齢等	性別	身長(cm)	体格	備考	ロザリオ
A区	1	194	96	165	30	全身骨格	仰臥伸展	南	成人	不明	不明	中柄/小柄		
	2	112	66	83	28	大臼歯2本	不明	北	成人?	不明	不明			
	3	94	47	(63)	18	乳歯/第1・2臼歯	不明	北	5~7才	不明	不明			
	4	70	46	-	-									
	5	68	48	-	-									
	6	74以上	44以上	36以上	14以上									
	7	139	50以上	95	20以上	乳歯	不明	北	3~5才	不明	不明			
	8	109	48	74	26									
	9	168	83	144	35	全身骨格	伏臥伸展	北	成人	不明	135~140			
	10	180	98	157	38	全身骨格	仰臥伸展	北	成人	女性?	150~155	小柄		小玉約90、大玉2、変形玉3
	11	190	62	164	46	全身骨格	仰臥伸展	南	成人(熟年?)	男性	155前後	小柄で頑丈	十字架の墨書	
	12	85	46	64	25								焦げた木材を使用	
	13	97	50	63	27	乳歯	不明	北	乳幼児1~3才	不明	不明			
	14	65	37	-	-									
	15	160以上	(84)	145以上	42	臼歯/人骨あり	不明	南	成人(熟年)	不明	不明			
	16	111	62	(75)	(38)									
	17	12以上	45以上											
	18	122	60	82	25									
	19	84	70以上											
	20	184	81	158	30	全身骨格	横臥伸展	北	子供(10代)	不明	130	小柄		
	21	187	84	150	30	全身骨格	伏臥伸展	北		男性			底板無く桟木留め	
	22	114	51	91	27	全身骨格	仰臥伸展	北	幼児	不明	70			
	23	198	58	164	40	全身骨格	伏臥伸展	北	成人(30~60才)	男性	155前後			
	24	205	84	167	37	全身骨格	仰臥伸展	北	成人(30~60才)	男性	165~170			小玉3、変形玉1
	25	145以上	90以上	163	32	全身骨格	横臥伸展	北	成人(20~50才)	女性?	150~155	小柄	底板東半分のみ	
	26	-	-	-	-	-	-	北	不明	不明	不明		攪乱坑で確認	
B区	27	180	50	167	31	全身骨格	仰臥伸展	北	成人(20~40才)	女性	155			
	28	190	67	165	32	全身骨格	仰臥伸展	北	成人(20~40才)	男性	155	頑丈		
	29	140以上	75	105以上	38	全身骨格	仰臥伸展	北	成人(20~60才)	男性	150(推定)			

図1　出土木棺一覧

珠を構成し、変形玉と大玉さらに小玉のいくつかは十字架を構成していたとみられ、埋葬時に右腕に装着されていたものと考えられる。

24号木棺では、直径6～7mmの小玉が3個、長さ9mm、幅6mmの変形玉が1個が出土した。紐孔の直径はいずれも約0.8mmである。

まとめ

今回の調査によって、16世紀のキリシタンの墓の様相がはじめて明らかとなった。以下に若干のまとめをおこなう。

まず今回検出した木棺墓群は、幅約6mの通路を挟んで北群と南群に二分され、両群とも棺の長軸に直行する東西方向に並列して墓を配置している。A区では北群は4列、南群は3列検出している。北群の北側への広がりは不明であるが、当初から4列で配置されたと仮定すると、北群の南北幅は10m前後に復元できる。同様に南群でも、4列で南北幅約10mの復元が可能であり、両群ともに4列で構成されていた可能性が高い。しかし、B区では南群の1列のみの検出にとどまっており、墓の配置が一様でなく、エリアごとに分布に格差があった可能性もある。いずれにしろ、棺の方向を南北にそろえ、一定の間隔で配置されており、きわめて規則性の高い墓地であったことがうかがえる。

つぎに、墓地の広がりについてみる。B区で検出した区画溝により、墓地の西限が確定できる。すなわち最西端に位置する29号墓から区画溝までの距離は9.5mを測り、墓地周縁と区画溝の間に約10mの空閑地が設定されていたようだ。また区画溝が南側で東方に曲り、墓地周縁から10m前後の位置で南側を画していると考えられる。これは、南群を4列に復元し

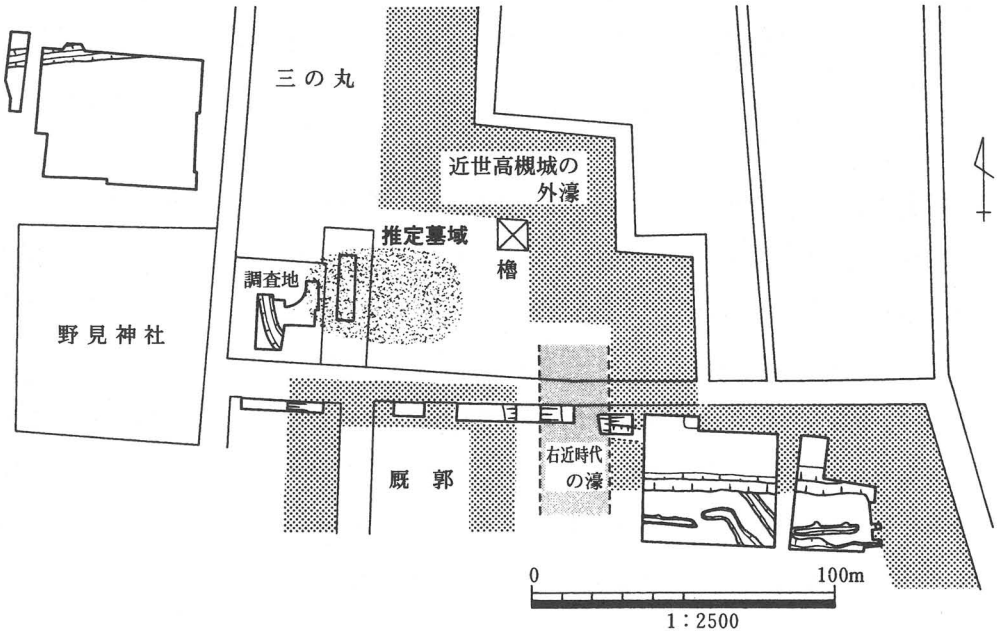


図3　周辺遺構配置図

た場合の最南部の墓から区画溝までの想定距離に近似し、大きな矛盾は生じない。

一方、A区東端の検出状況から、北・南両群ともに東側に広がることは確実である。墓地の東限については、昭和63年に本調査区の東南側で検出した幅24mの南北方向の濠が参考になる。この濠は高山右近の時期のもので、墓地と同時に存在していたとみられ、この濠よりさらに東方に墓地が広がっていたとは考えにくい。したがって、濠端の西側が、想定できる墓地の最大の東限となる。しかし、実際には濠端には土塁等や西側でみられた空閑地の存在が想定され、一定の幅を差し引いて考えるべきであろう。具体的には、墓地の最西端の29号墓から濠端までは約80mであり、上記の理由により、墓地の東西幅としては50m程度と推定することができる。そして、前述のごとく北・南両群を約10m幅で4列を配置したと仮定すれば、挟まれた約6mの通路を加えて南北幅は約26mとすることができ、墓地の広がりは東西約50m、南北約26mの範囲と推定され、その面積は約1300㎡に達する。

墓地がつくられた年代ついては、これらが大規模な盛土の下層で検出された点が重要である。三の丸北郭地区における2mあまりの盛土は、元和3（1617）年の幕府による城の修築時のものとみられ、これらの墓地はそれ以前の年代が与えられる。一方、十字架を墨書した棺の埋葬は、キスト教信仰が盛んであった時期の所産とみられ、高槻において信者が急増したとされる高山飛騨守・右近父子在城期（1570～1585）に営まれたものとみることができる。このキリシタン墓は豊臣秀吉によるバテレン追放令（1587）以前、つまりキリスト教布教が認められていた時期のものであり、キリシタン墓としては日本最古のものと考えられる。

また、信仰そのものともいえる宗教具のロザリオを発見したことにより、当時の布教の一端が明らかとなった。ポルトガル人宣教師ルイス・フロイスが著した『日本史』には、1574（天正2）年に高山飛騨守は京都から異教徒の挽物師を高槻に呼び寄せ、ロザリオを製作させたという記述がある。今回検出したロザリオはまさにそれに該当するものと考えられ、製作時期がほぼ特定できる最古のものであり、画期的な発見といえる。

さて、高山右近時代の高槻城については、『日本史』に詳細な記述があり、当該墓地との関連が注目される。なかでも1574年に建立したとされる天主堂の推定地点は、今回の調査区のすぐ西側にあたる。検出した区画溝はまさに教会と墓地を区画する溝と解釈することが可能であり、この墓地は教会に附属する施設の一部であったとみることができる。

このように、今回のキリシタン墓の調査は、日本におけるキリスト教布教史において貴重な資料を提供するとともに、これまでほとんど不明であった中世高槻城において、はじめてまとまった遺構を検出した点で特筆すべきであろう。今後周辺の調査の進捗により検出される遺構を通して、高槻城の歴史的背景も一層鮮明になることが期待される。

高山右近・高槻城関係年表

西暦	年号	高山右近・高槻城関係	主な出来事	教会関係
1498			ヴァスコ・ダ・ガマがインド航路を発見	
1510			ポルトガル人、インドのゴアを占領	
1543	天文12		ポルトガル人、種子島に鉄砲を伝える	
1549	天文18			フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸(8月15日）以後布教に努める
1552	天文21			ザビエル、中国で没
1560	永禄3		小西行長、受洗	宣教師ガスパル・ビレラ京都に教会をつくる
1563	永禄6	父 高山飛騨守、大和・沢城でビレラにより受洗		
1564	永禄7	高山右近、イルマン・ロレンソにより受洗		
1565	永禄8			松永久秀、フロイス、ビレラを堺に追放
1568	永禄11	高山父子、摂津芥川城を預かる	信長、義昭を奉じて上洛	ビレラ、五島・天草で布教
1569	永禄12			フロイス、信長に謁見、布教を許可される
1570	元亀元	高山父子、高槻城へ入る		カブラル、布教長になる
1571	元亀2	白井河原合戦にて和田惟政に従う惟政戦死		
1573	天正元	高山父子クーデターで和田惟長を討つ荒木村重の配下に属する		ヴァリニャーノ、巡察師に任じられローマを出発
1574	天正2	右近、高槻城主として活動 このころ高槻に教会を建立 飛騨守、ロザリオ製作のため京都から挽物師を招請		
1575	天正3	高山親子、京都・南蛮寺の改築に尽力 このころから、キリシタン墓地の形成はじまる		
1576	天正4		信長、安土城を築く	安土にセミナリオできる
				京都・南蛮寺竣工
1578	天正6	荒木村重、信長に対し謀反 右近、信長に投降		
1579	天正7			ヴァリニャーノ来日「日本年報」作成開始
1580	天正8			有馬にセミナリオができる
1581	天正9	ヴァリニャーノを迎え高槻で復活祭執行 領民25000人のうち18000人がキリシタンとなる		ヴァリニャーノ、信長に謁見
1582	天正10	山崎合戦にて先陣を努める 安土からセミナリオを高槻に移す	本能寺の変	少年遣欧使節、ヴァリニャーノとともに出発
1583	天正11	賤ヶ岳合戦で岩崎山を守る		大坂・南蛮寺建立
1584	天正12	小牧・長久手の戦に参戦		
1585	天正13	右近、明石に移封 高槻は秀吉の直轄となる	秀吉、関白となる	
1586	天正14		秀吉、大坂キリシタン教会を訪ね、日本福管区長コエーリョを引見	
1587	天正15	右近、追放　小豆島にかくまわれる	秀吉、バテレン追放令を発す	
1588	天正16	前田利家、右近を金沢に引き取る		
1590	天正18			少年遣欧使節、ヴァリニャーノ
				とともに帰国　印刷機を伝える
1591	天正19			ヴァリニャーノ、秀吉に謁見
1592	文禄元	右近、肥前名護屋にて秀吉に謁見	文禄の役	「どちりな・きりしたん」1592版発行 フランシスコ会士 ペドロ・バウティスタ来日 ドミニコ会士ファン・コーボ来日
1596	慶長元			26聖人殉教
1597	慶長2		慶長の役	ルイス・フロイス没
1600	慶長5		関ヶ原の戦い	
1601	慶長6			ヴァリニャーノ「日本教会史」執筆開始
1603	慶長8		徳川家康、江戸幕府をひらく	
1605	慶長10			ヴァリニャーノ、マカオで没
1612	慶長17		幕府、禁教令を発令	
1614	慶長19	右近、金沢から長崎を経てマニラに渡る	大阪冬の陣	
1615	慶長20	右近、マニラで没	大阪夏の陣	
1998	平成10	キリシタン墓の発掘（5月～8月）		
1999	平成11	ロザリオの発見（2月）		ザビエル上陸450年

嶋上郡衙跡（23-D 地区他）の調査

木 曽　広

今回の調査地は、遺跡の北西端にあたり、調査地の小字名は、「フクツカ」と称する。北西約200mの台地上には芥川廃寺瓦窯跡があり、当該地の周辺では、これまでに竪穴住居跡や掘立柱建物跡等の遺構がみつかっている。

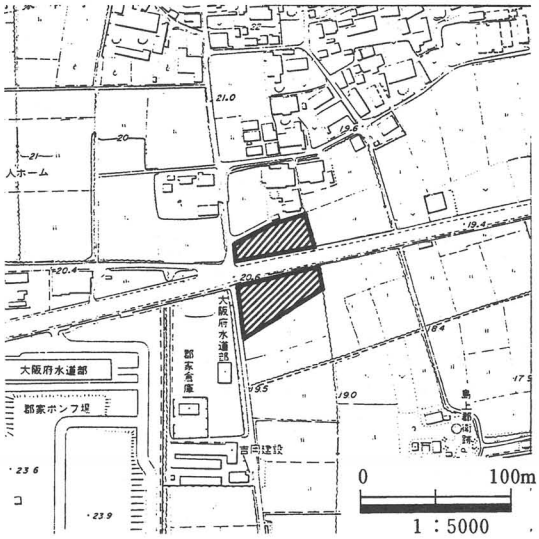


図1　調査位置図

調査地は府道により南北に二分されており、調査を実施した順位別にそれぞれA調査区（東西20m、南北19m）、B調査区（東西3m、南北9m）、C調査区（東西15.8m、南北3.6m）、D調査区（東西49m、南北6.6m）とした。なお、A・B・C調査区は23-D・24-A地区、D調査区では13-P・14-M地区にそれぞれ属しており、一括して概略を報告する。

基本的な層序は、耕作土（0.2m）、床土（0.06m）で、その下層には暗褐色土（0.18m～0.25m）の遺物包含層が堆積していた。これを除去すると黄灰色砂質土の地山となり、遺構はすべてこの土層の上面で検出した。

遺構・遺物（図版第6～8）

調査区のほぼ全域から、竪穴住居跡1基、掘立柱建物跡2棟、井戸2基、溝2条、土坑・ピット等の遺構を検出した。

住居1はA調査区北端で検出した。北半は調査区外となるが、一辺6mの方形の竪穴住居跡と考えられ、周溝は幅0.1～0.2m、深さ0.04mを測る。カマド・主柱穴等は検出できなかった。弥生時代後期の土器が出土している。

掘立柱建物跡は2棟検出した。建物1はA調査区中央部に位置する。桁行3間（9.0m）、梁行2間（5.5m）の南北棟で、柱穴は一辺0.5～1.2mの方形である。柱根等は遺存していない。建物の主軸方位はN-1°-W（基準は磁北。以下同様）である。

建物2は建物1に重複して検出した。柱穴の切り合いから建物2が新しい。桁行3間（6.4m）、梁行2間（4.0m）の東西棟である。柱穴は一辺0.7～1.0mの方形で、柱根等は遺存しない。

建物の主軸方位はN-4°-Wであり、建物1とともに建物主軸の年代観から、おおむね8世紀代のものとみられる。

井戸1はD調査区東端付近で検出した石組み井戸である。掘形の直径は検出面で3.8m、深さ1.7m、石組み内面の直径は上端で1.8m、庭部で0.8mを測る。石組みは、比較的大形の河原石を庭部に横積みし、その上に人頭大の河原石を小口積している。埋土と石組みから均整

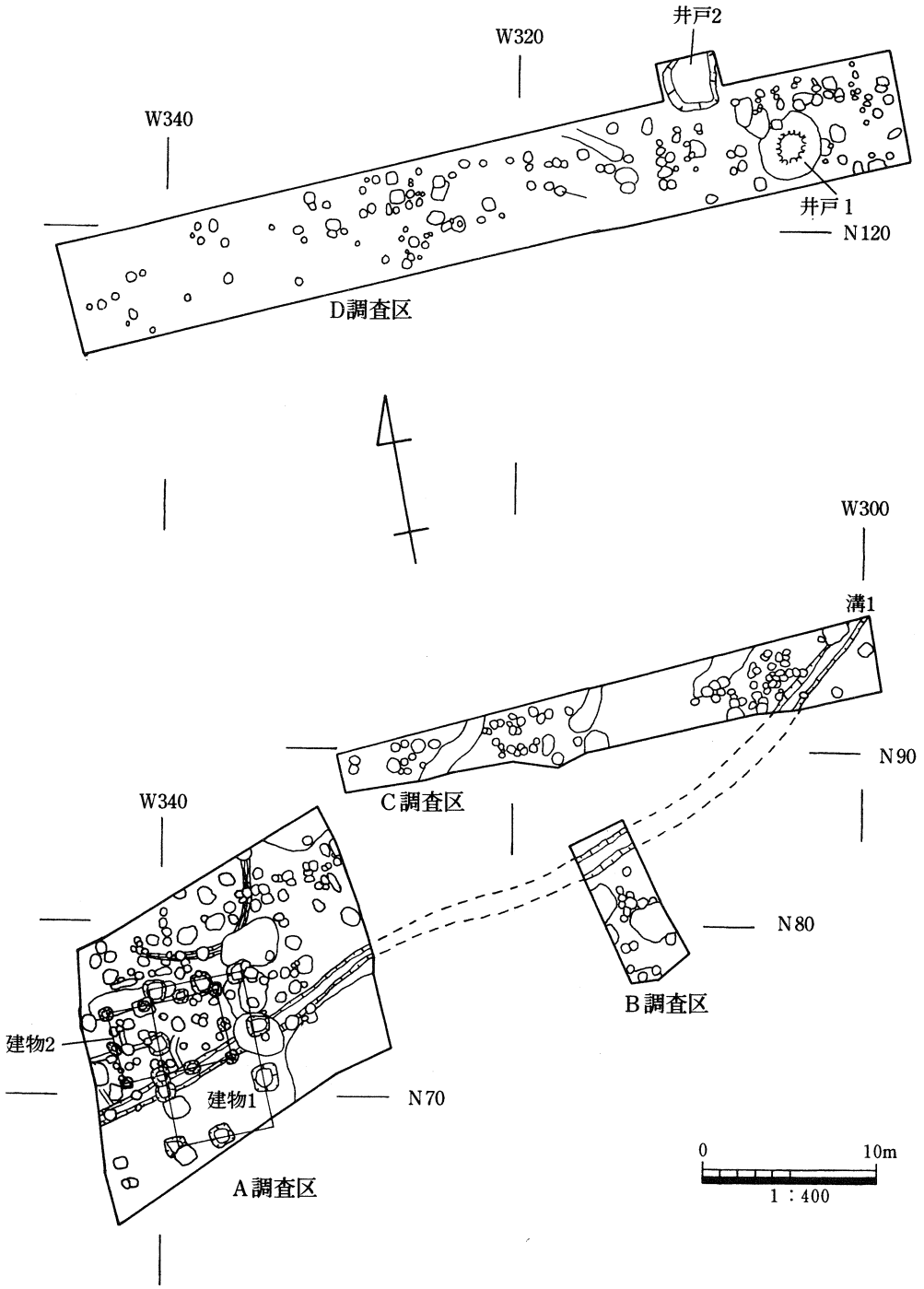


図2　遺構平面図

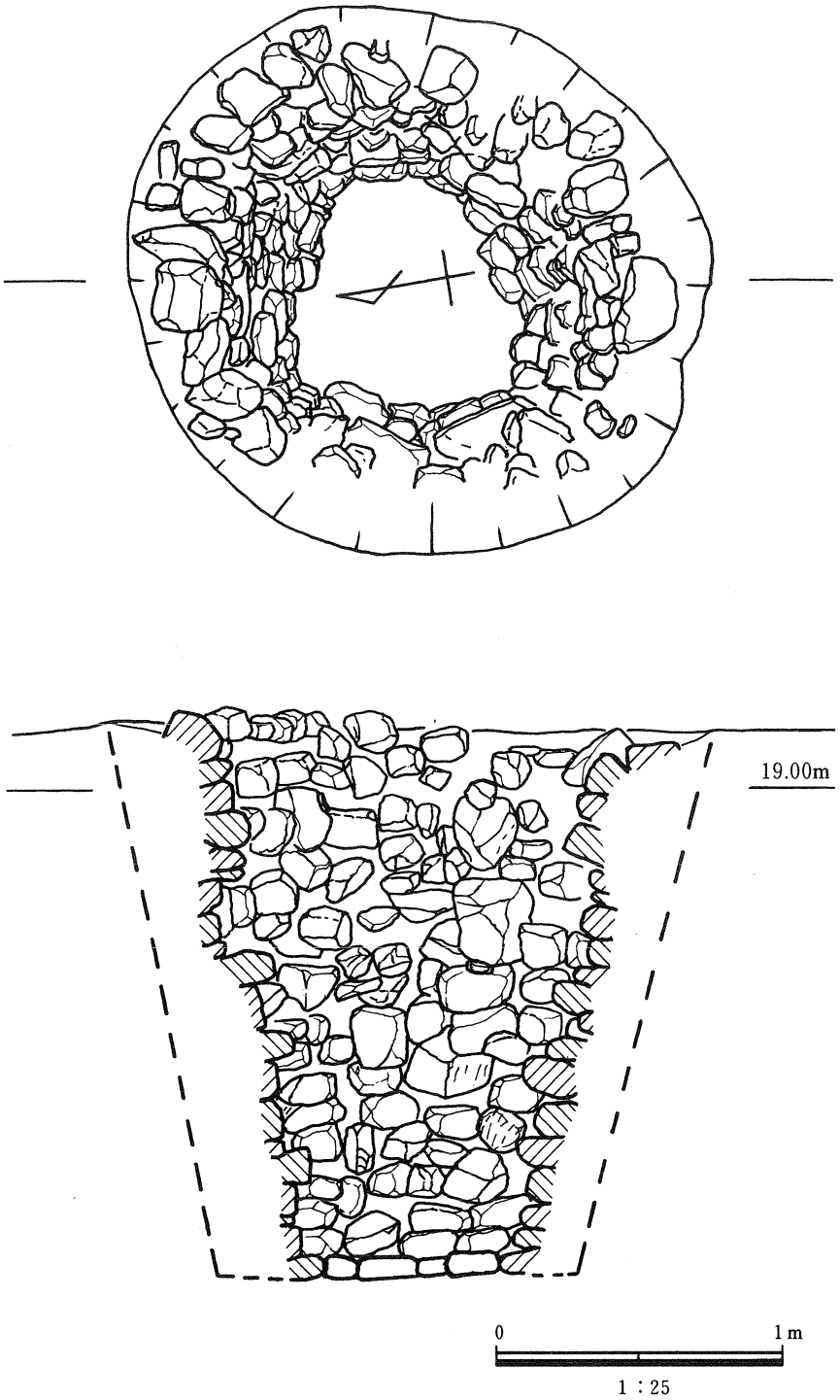


図3　井戸1平面図・断面図

唐草文軒平瓦片2点が出土した。この軒平瓦は、10世紀代に芥川廃寺の所用瓦として芥川廃寺瓦窯で焼かれたもので、井戸の時期としては平安時代中頃とみられる。

溝1はA・B・C調査区で検出した。幅0.5～1.0m、深さ0.4～0.5mを測り、断面U字形の

溝で、埋土は暗褐色土である。建物1・2の柱穴に切られており、これらの建物よりも古い。3つの調査区において、未掘部分を含めて約60mにわたって存在を確認でき、さらに北東、及び南西に延びている。この溝は、方向や形状から、1981年（14-J・K地区）、1986年（5-J・K地区）で検出した溝に連なるものと思われる。

遺物は、各遺構や包含層から弥生時代から中世の遺物が出土している。そのなかで、ピット1から出土した2点の手焙形土器は注目される。2点とも段状口縁を呈するもので、外面下部に煤が付着している。これらは胎土、色調から、どちらも当地域で生産されたものとみられる。

まとめ

今回の調査で検出した溝1は、前述のように、当該地の北東に約200mに位置する14-J・K地区、5-J・K地区で検出した溝1に連なるものと考えられる。とすれば、200m以上にわたって北東側から遺跡の北側を貫き、さらに南西方向に延びている。この溝の時期としては、弥生時代後期と考えられ、建物跡との切り合いから8世紀代には埋まっていたものとみられる。その性格は灌漑用水路とみられる。

今回の調査では、弥生時代から平安時代にかけての遺構が検出され、既往の調査成果をあわせて考えると、当該地が一貫して居住地として利用されていたことが確かめられた。溝1の延長部分の検出を含めて、今後の周辺の調査が期待される。

参考文献

1981年「嶋上郡衙跡（14-J・k地区）の調査」『嶋上郡衙跡発掘調査概要・5』
1986年「嶋上郡衙跡（5-J・k地区）の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・10』

津之江南遺跡（98-C地区）の調査

宮　崎　康　雄

津之江南遺跡は芥川と女瀬川の合流点に近い標高10m前後の低位段丘南端にひろがる。昭和47年の調査以降、旧石器時代・弥生～中世にかけての遺構・遺物を多数検出し、平成10年には平安時代の大規模な掘立柱建物跡がみつかった（「津之江南遺跡（98―1地区）の調査」『嶋上遺跡群23』1999）。

今回報告する98―C地区はこの98―1地区の約50m東方に位置し、南北にのびる低い段丘の東裾部にあたる。

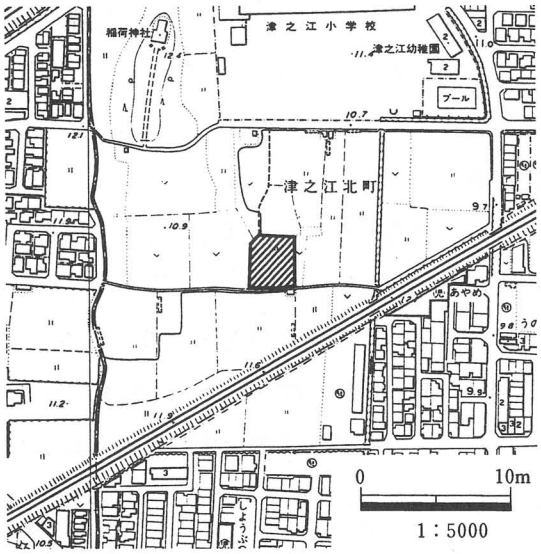


図1　調査位置図

遺構・遺物（図版第9・10）

検出した遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸・土坑・溝・柱穴などである。

竪穴住居1は調査区北東端で検出したもので、大部分は調査区外にある。平面形は方形と推定され、深さ0.2mをはかる。建替えにより拡張していた。出土遺物はなかった。

掘立柱建物跡は2棟検出した。建物1は調査区北東隅で検出した南北棟で、東西2間（3.6m）、南北3間以上（4.8m以上）をはかり、北側は調査区外へつづく。柱穴は一辺0.4～0.7mの方形をなし、深さは0.2～0.4mである。方向はN-3°-Wである。建物2は調査区東側にある南北3間（5.5m）、東西2間以上（3.4m以上）の東西棟である。柱穴は直径約0.3mの円形をなし、南北柱列の方向はN-0°-Wを示す。時期は11世紀後半である。このほか、多数の柱穴を検出しているが、建物としてまとまらなかった。

井戸1は調査区北東部で検出した。掘形の平面形はやや東西に長い長円形をなし、二段に掘り込まれていた。東西2.0m、南北1.8m、深さは約1.9mである。井戸枠等は廃棄時に抜かれたのか遺存しない。底付近からは11世紀後半頃の土師器や瓦器が出土した。

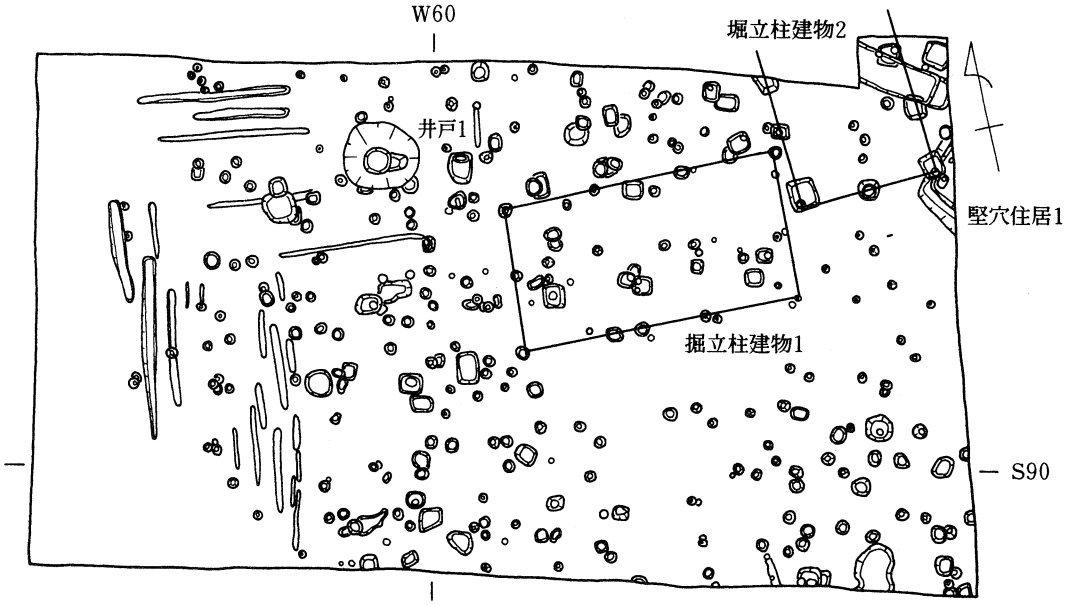
西半部では東西および南北方向にのびる浅い溝を検出した。これらはいずれも幅0.3m前後、深さ0.05～0.1mをはかる断面逆台形の浅い溝である。時期を決めうる遺物の出土はなく、井戸1と柱穴を切っていた。

まとめ

今回の調査で検出した遺構のうち、竪穴住居１は出土遺物が無いものの、その形状や周辺での検出状況からすれば弥生時代後期に属すと考えられ、現在のところもっとも西側に位置する竪穴住居跡となっている。

古代・中世については居住域が本調査区にも及んでいた。建物１の出土遺物は認められなかったものの、柱列の方向や柱穴の形状、周辺地区での遺構分布などから判断すればその帰属時期は８世紀から９世紀とすることができよう。いっぽう、建物２・井戸１は周辺調査区と同様に11世紀後半頃に属し、一帯には該期の集落が展開していたと考えられる。小規模な溝は鋤溝などの耕作に関連するものとみられる。いずれの溝も柱穴や井戸を切ることからすれば、集落廃絶後に一帯が耕地化したと考えられるが、その時期については明らかにしえなかった。

以上、今回の調査を概観したが、津之江南遺跡は長期にわたって展開していたことが再認識された。周辺地域での今後の調査の進展にともない、遺跡の内容はより鮮明となろう。



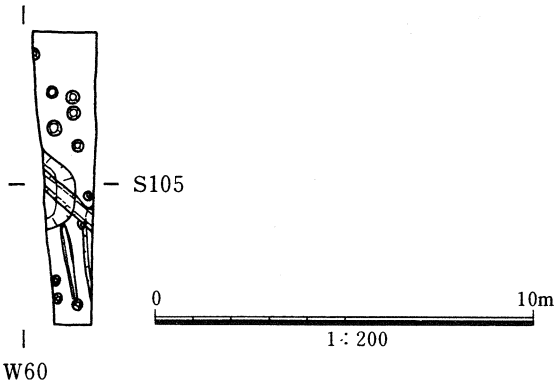


図２　遺構平面図

今城塚古墳第２次規模確認調査

高　橋　公　一

今城塚古墳は淀川北岸地域で最大の前方後円墳で、西暦531年に亡くなったとされる継体大王の真の陵墓と考えられている。昭和33年に国史跡に指定され、教育委員会では平成8年に詳細な測量図を作成し、ついで平成9年には第1次規模確認調査を実施した。この調査により、後円部や内濠についての重要な知見を得るとともに、墳丘を切り崩し城砦として再構築している状況がはじめて明らかになった。この城砦は巨大なブロック土で内濠を埋め立てた様子から、戦国時代末期に築かれたとみられ、「今城山城（いまきやまじょう）」と命名した。

今回の調査は、昨年の第1次規模確認調査の成果を受けて、後円部北側の内濠の規模・形状の把握、および「今城山城」の様子や築城の方法を知るためにおこなった。

遺構・遺物（図版第11～14）

〈古墳について〉

内濠底を検出し、これとともに後円部側と内堤側の裾部分を確認した。

内濠底の幅は18.5ｍ、深さは現地表面から約3ｍを測り、底は平坦である。後円部および内堤斜面には、人頭大からやや大きめの石を据えた葺石状の列石がある。内堤側は幅約1.5ｍの範囲で良好に検出できたが、後円部側は大半が崩落していた。傾斜面の角度は内堤側は23度、後円部側では裾から2ｍほどは25度でたちあがった後、列石付近で15.5度とやや傾斜が緩くなっている。

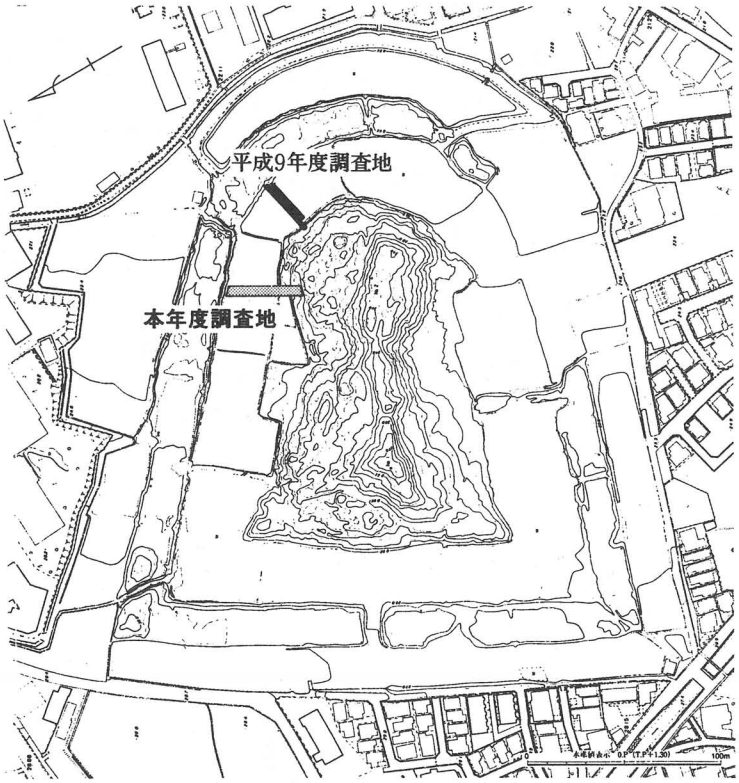


図１　調査位置図

内濠底の後円部寄りでは溝を検出した。溝は幅0.4m、深さ0.2mの断面逆台形の溝で、後円部の裾に沿って掘られ、第1次調査で検出した築造時の排水溝とみられる溝1につらなるものとみられる。

濠底から約1mの厚さに堆積土（泥土層）がみられ、円筒埴輪片のほか、ドングリや倒木などを多量に検出し、また石棺の破片とみられる阿蘇溶結凝灰岩の細片も出土した。さらに濠底付近では、木製品も検出した。一方、調査区北端に位置する内堤斜面中腹では、埴輪片がまとまって出土した。

〈今城山城について〉

古墳を改修して城砦として利用するための大規模な土木工事の様子が明らかとなった。墳丘から切り出した巨大な土のブロックが大半を占める埋積土によって、内濠を埋めている。一辺2mから大きいもので5mを越えるブロック土をひとつの単位として、まず内濠の内堤側（外側）から落とし込み、順次後円部方向（内側）へ埋めていき、ブロック土とブロック土に挟まれた谷間に褐色系の土を充填している。第1次調査ではこれとは逆に後円部側から埋めていた状況がみられたが、内濠を埋めるに際して現場に即応した手順が採られたとみられる。

ブロック土内には、長さ約0.4m、厚さ約0.1mの小土塊の重層的な堆積が観察され、これらの小土塊が古墳の墳丘を構成していた最小の単位である。また、ブロック土の上面には均質な褐色粘質土があり、内濠を埋めた後、上面の凹凸を人為的に均らしていたとみられる。埋積土のブロック土の隙間の土層から天目茶椀が出土した。

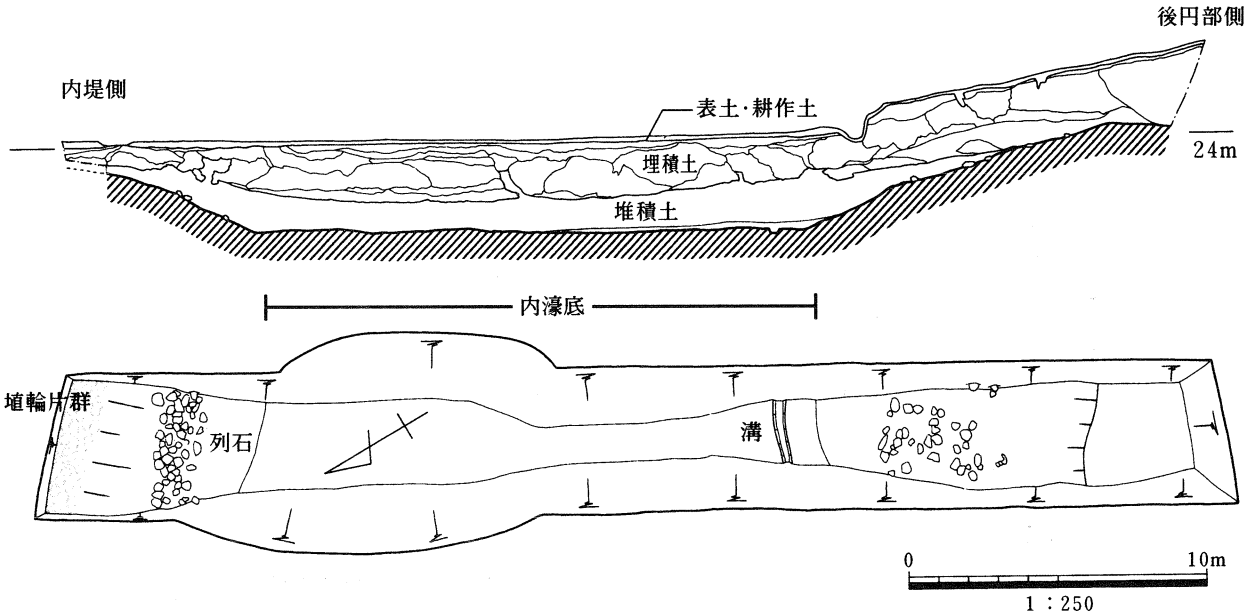


図2　調査区平面図・断面図

一方、これまで後円部墳丘の名残であるとされてきた後円部上の傾斜面の下層にもブロック土の存在が確認され、内濠の埋め立てと同様に墳丘土を分断して切り出し、墳丘部に土塁や堀切を形成したものと判明した。そして、これまで古墳北半部の墳丘の名残とみられていた小山のような起状は、じつは、築城時に切り出され動かされもので、むしろ今城山城築城に伴う残余の土塊である可能性が指摘できる。

第1次調査で検出した障子堀は、今回の調査では確認していない。また内濠部の埋積土上面でも、城にかかわる遺構は検出できなかった。

〈遺物について〉

内濠の堆積土から、埴輪片や石棺破片、木製品等が出土した。

埴輪は円筒埴輪片が大半を占め、二本マストの船を表したヘラ記号をほどこすものがみられる。その他、蓋形埴輪や線刻のある家形埴輪もある（図版第14-1・2)。石棺片はいずれも

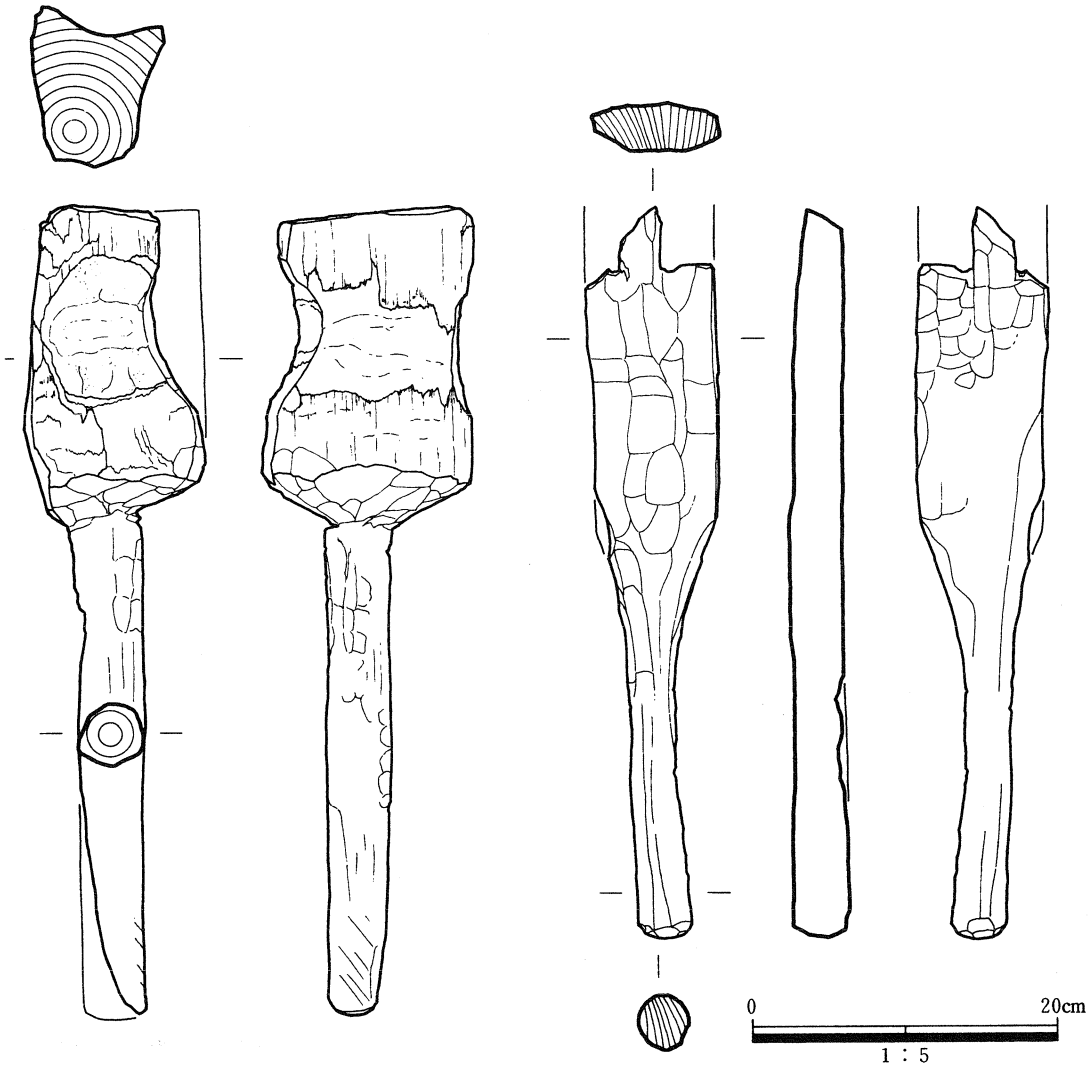


図3　内濠出土木製品

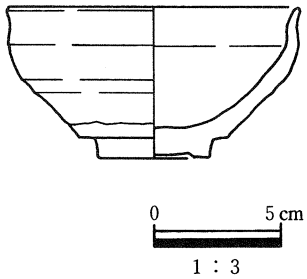


図4　内濠出土天目茶椀

阿蘇溶結凝灰岩製である。

木製品は濠底から2点みつかった。掛矢（図3-1、図版第14-3）は、不定形な直方体の身と柄を一木から削りだしており、身の正面と側面に打突痕跡が看取できる。全長54cm、身は長さ21cm、幅12cmで、厚さ14cmで、柄は長さ33cm、直径は4.3cmを測る。

もう一点は、扁平な身と柄を備えた櫂状のもので、先端は欠損する（図3-2、図版第14-4）。現存長は48.5cm、身の幅8.5cm、身の中心部の厚さは3.5cmで、柄の直径は3.5cmである。これらは、堆積土の最下層から出土しており、古墳築造時に使用された土木具とみられる。

また内濠の埋積土のブロック土間の隙間に充填した土層から、16世紀後半代の瀬戸焼きの天目茶碗（図4・図版第14-6）が出土した。口径11.5cm、高さ6.0cmを測る。築城工事の際に投棄されたものとみられる。

まとめ

今回の規模確認調査により、後円部北側における内濠部分の形状や規模を把握することができた。以下、前回の調査成果を交えて簡単にまとめる。

まず古墳についての成果を第1次調査と比較してみると、内濠底幅は18.5mで前回調査の20mを下回っており、内堤斜面の角度にも違いがみられる。これらは、第1次調査地が後円部側に位置するのに対し、今回は後円部側から前方部側に移行する部分にあたり、内堤や濠の形状が異なっているためとみられる。また後円部斜面については、第1次調査では25度でたちあがった後、犬走り状の平坦面がみられたが、今回は検出していない。しかし裾のたちあがり角度は25度と同じ値を示し、後円部斜面の形状をある程度推定することが可能となった。

また今城山城については、内濠を巨大なブロック土で埋めるという一連の作業に代表される築城工事の実態が追認され、調査前に推定した以上に大規模かつ計画的であったことが判明した。このような大土木工事を伴う築城の主体者として、永禄11（1568）年に摂津へ侵攻し、三好勢を一掃した織田信長を想定していたが、今回の調査で出土した天目茶碗は、そうした推測を裏づけるものといえよう。

Ⅱ　文化財保護啓発事業

1. 歴史シンポジウム

「検証　邪馬台国　－安満宮山古墳をめぐって－」

日　時　　平成10年5月10日

内　容　　市制施行55周年記念事業として、青龍三年銘鏡を含む5面の青銅鏡が出土した安満宮山古墳の調査成果をもとに、古代史最大の謎とされる邪馬台国論にせまるシンポジウムを開催した。

コーディネーター　　水　野　正　好（奈良大学学長）

パネリスト　　門　脇　禎　二（京都橘女子大学学長）

原　口　正　三（前甲子園短期大学教授）

都　出　比呂志（大阪大学教授）

石　野　博　信（徳島文理大学教授）

酒　井　龍　一（奈良大学教授）

福　永　伸　哉（大阪大学助教授）

森　田　克　行（市立埋蔵文化財調査センター次長）

会　場　　現代劇場大ホール

主　催　　高槻市・高槻市教育委員会・高槻ライオンズクラブ

協　賛　　(財)高槻市文化振興事業団

参加者　　1，416人

2. ハニワづくりとスケッチ・ぬり絵大会

日　時　　平成10年6月6・7日

内　容　　より多くの市民が、文化財に対して親しみをもち、また文化財をもっと理解してもらうことを目的として、ハニワ工場公園においてハニワにちなんだイベントを実施した。ハニワづくりの部では、新池遺跡から発掘されたハニワをモデルにしたものや、全くオリジナルのユニークな作品がうまれた。スケッチの部では工場公園の様子をいきいきと描写していた作品が多くみられ、またぬり絵の部ではハニワ工場公園のキャラクターたちを楽しい色づかいで彩色した作品が目をひいた。各作品は厳正な審査をおこない、各部門ごとに入選作を選び、すべての応募作品はジャスコシティ高槻、さらに入選作品は小さな展覧会会場でも展示した。

協　賛　　ジャスコシティ高槻

参加者　　６５３人

作品展示　　ジャスコシティ高槻　7月22日～26日

　　小さな展覧会会場　9月29日～10月4日

3. 小さな展覧会

日　時　　平成10年9月29日～10月4日

内　容　　「奈良・平安時代のくらし」をテーマに、緑釉陶器をはじめ市内出土の墨書土器や陶磁器、木製品などを展示し、また発掘調査の写真パネルやイラストも交えて摂津国嶋上郡と呼ばれた奈良・平安時代の高槻の様子を再現した。速報コーナーでは、高槻城三の丸跡キリシタン墓から出土した木棺と、今城塚古墳出土から出土した石棺の破片を展示した。

見学者　　３，１１９人

講演会　　「難波宮と古代の高槻」（平成10年10月4日）

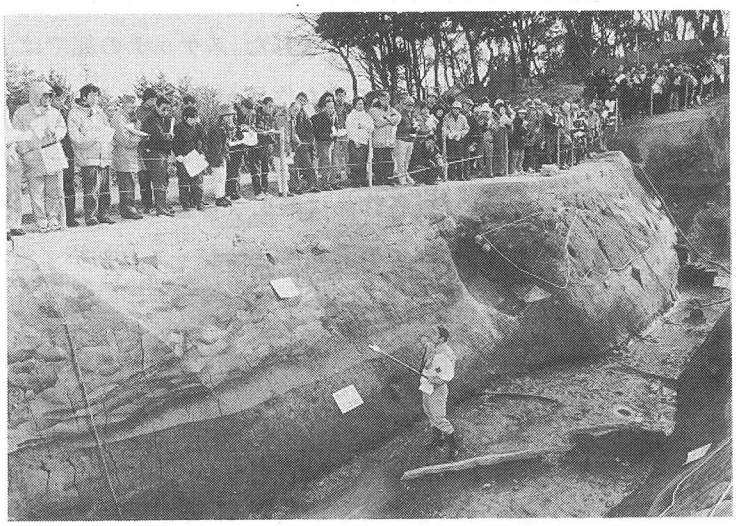
講　師　　中尾芳治（手塚山学院大学教授）

参加者　　６３人

4. 史跡 今城塚古墳発掘調査現地説明会

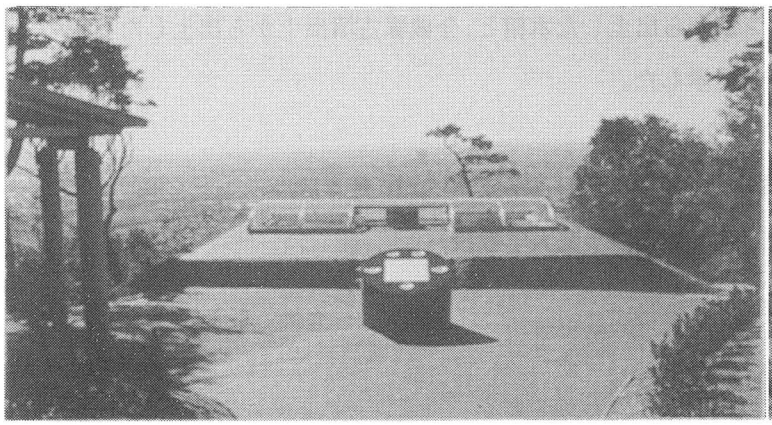
・平成11年1月9日（参加者725人）

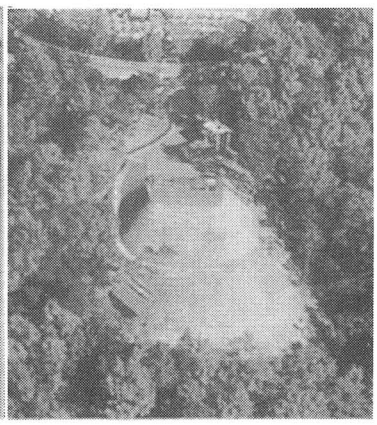
史跡 今城塚古墳の後円部北側で第2次規模確認調査として実施した調査成果を市民に公開、啓発するため現地説明会を開催した。調査では、古墳築造当時の内濠の状況が明らかになるとともに、戦国時代の築城が予想以上に大規模であり墳丘が改変を受けていたことが判明した。



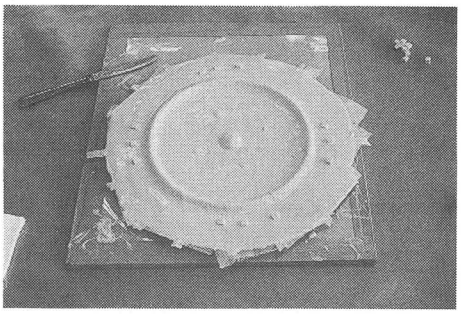
5. 安満宮山古墳の整備及び出土品の複製品の作成

青龍三年銘鏡をはじめ、女王・卑弥呼が魏から授かったといわれる「銅鏡百枚」の実態にせまる5面の銅鏡が出土した安満宮山古墳を保存・活用するため、市制施行55周年記念事業として復元整備をおこない、公開した。今回の整備では、墳丘を古墳築造当時の姿に復元し、ガラスシェルター内に精密な複製によって発掘調査の様子を再現した。また説明板には、出土した銅鏡をじかに感じとることができるように、銅鏡の復元品を埋め込んだ。整備面積は整備面積800㎡で、平成10年11月30日竣工し、12月11日に竣工式をおこなった。

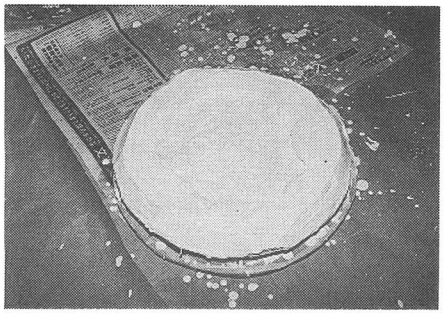




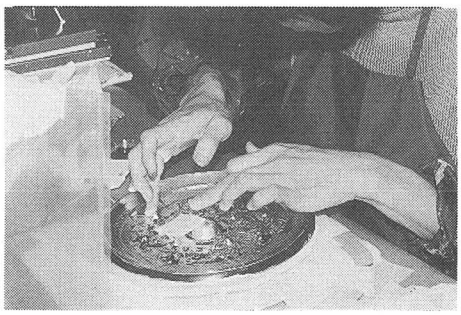
一方、銅鏡及び鉄刀等の出土品について、保存公開に供するため、精密な複製品を製作した。これらは実物を精密に写し取った型に合成樹脂を注入して成形し、彩色したものである。特に銅鏡の複製においては、合成樹脂本体にごく薄い金属箔を貼ったうえに彩色を施す手法が採用され、出土当時の白銅色の質感が再現された。また、ガラス小玉は墓坑底から切り取った形で出土状況を再現している。



1　実物を錫箔で養生のうえ、シリコンを塗布して内型をつくる



2　内型を支える石こうの外型をつくり樹脂を流し込む



3　型取りした樹脂製の複製品本体に金属箔を貼る

4　実物どおりに彩色し、鏡面を磨き仕上る

6. 市立埋蔵文化財調査センター見学者数

総　数　　3,933 人（延べ　112,477 人）

7. 新池ハニワ工場公園見学者数

総　数　　17,328 人（工場館入館者数　13,428 人）

8. 安満宮山古墳見学者数

総　数　　3,740 人（平成 10 年 12 月 11 日～平成 11 年 3 月 31 日）

Ⅲ　指定文化財

本山寺　木造不動明王立像

本山寺木造不動明王立像は、平成10年10月28日付けで市指定有形文化財に指定された。

〈種　　別〉　有形文化財・彫刻

〈名称・員数〉　木造　不動明王　　1躯

〈所　在　地〉　高槻市大字原3298番地　本山寺

〈所　有　者〉　宗教法人　本山寺（代表役員　百済寂仁）

〈品　質　等〉　木造・彩色

〈法　　量〉　像高96.5cm　髪際高90.4cm　　頭長17.2cm

面長11.2cm　面幅9.6cm　面奥14.8cm

肘張39.2cm　裾張25.4cm　胸厚（右）14.3cm

胸厚（含衣）17.1cm　　両足開内12.0cm　同外21.3cm

〈時　　代〉　平安時代後期

〈概　要〉　本像は、本山寺本堂脇檀厨子に安置される木造彩色、半等身大の天地眼の不動明王立像である。乱髪、弁髪を左にたらし、左手に羂索、右手に剣を執る。條帛・裳を着用、臂釧・腕釧（ともに金銅打出）は鋲頭に小花をもつ釘でとめる。

材種は不明。頭体一材で左右割矧ぎ（または二材製）と思われるが、頭部の矧ぎ目は確認できない。頭体内刳り、両手は左右各一材で彫眼する。

胸飾（銅製）、持物、光背、台座は後補。本体では、腰から垂下する二條の結び帛及び右足先を後補とするほかは完好で、保存はきわめてよい。肌は群青色であったものと推定される。着衣には中世の後補と思われる盛り上げ彩色が施され、條帛に唐草文、裳の表には団花文と縁に牡丹、裳の裏には竜、縁に蔓唐草、腰布には鳳凰をそれぞれ描く。

像は不動明王本来の肥満充盛の趣を平安風の気品ある柔らかさで包んだ美作で、口端からこぼれ出る白牙が極致ともいえるほど小さいことや、髪束の変化ある動き、條帛の流れを感じるような表現などをあわせ考えると、十二世紀後半頃の一流の仏師の作であるとみられる。

Ⅳ　資料紹介

安満遺跡98―A地区出土の土器

宮　崎　康　雄

安満遺跡は高槻市東部を貫流する檜尾川の扇状地上にひろがる集落である。遺跡は縄文時代から中世にいたるまで連続して営まれ、とくに弥生時代の集落は三島地域を代表する拠点集落として位置づけられている。古墳時代以降は集落の中心を東に移動しながら展開し、古代・中世においても高槻市東部の代表的な集落として位置づけられる。

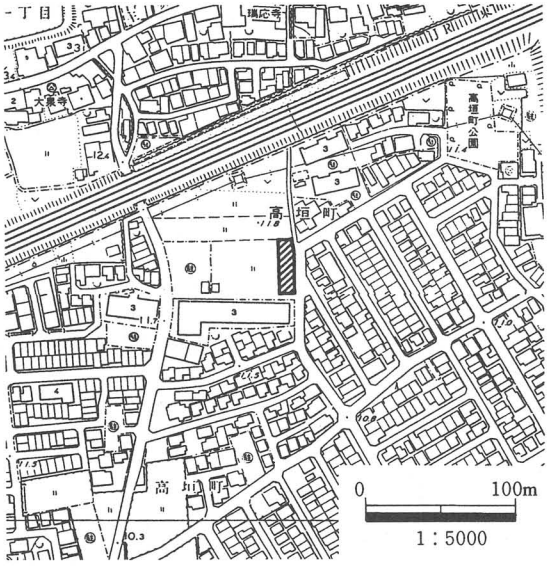


図1　調査位置図

今回報告する古代の土器は遺跡の東部にあたる98―A地区で検出した溝1から出土したものである。この地区の南側一帯でおこなわれた調査では、奈良・平安時代の集落がひろがっていることが判明しており、当該地区の調査においても8世紀～12世紀頃を中心とする遺構・遺物を検出している。おもな遺構としては柱穴・溝などがあげられる（図2、図版第15）。柱穴は調査区全体で検出したものの建物としてまとめるには至らず、時期も明確ではない。溝1は調査区北側で検出した東西溝である。西側から東側へゆるやかにカーブし、

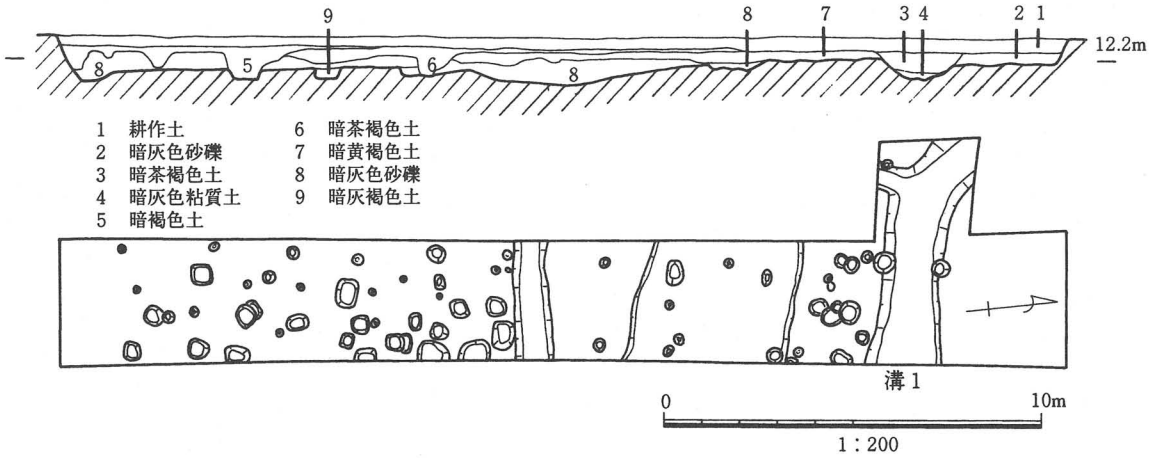


図1　平面図・土層図

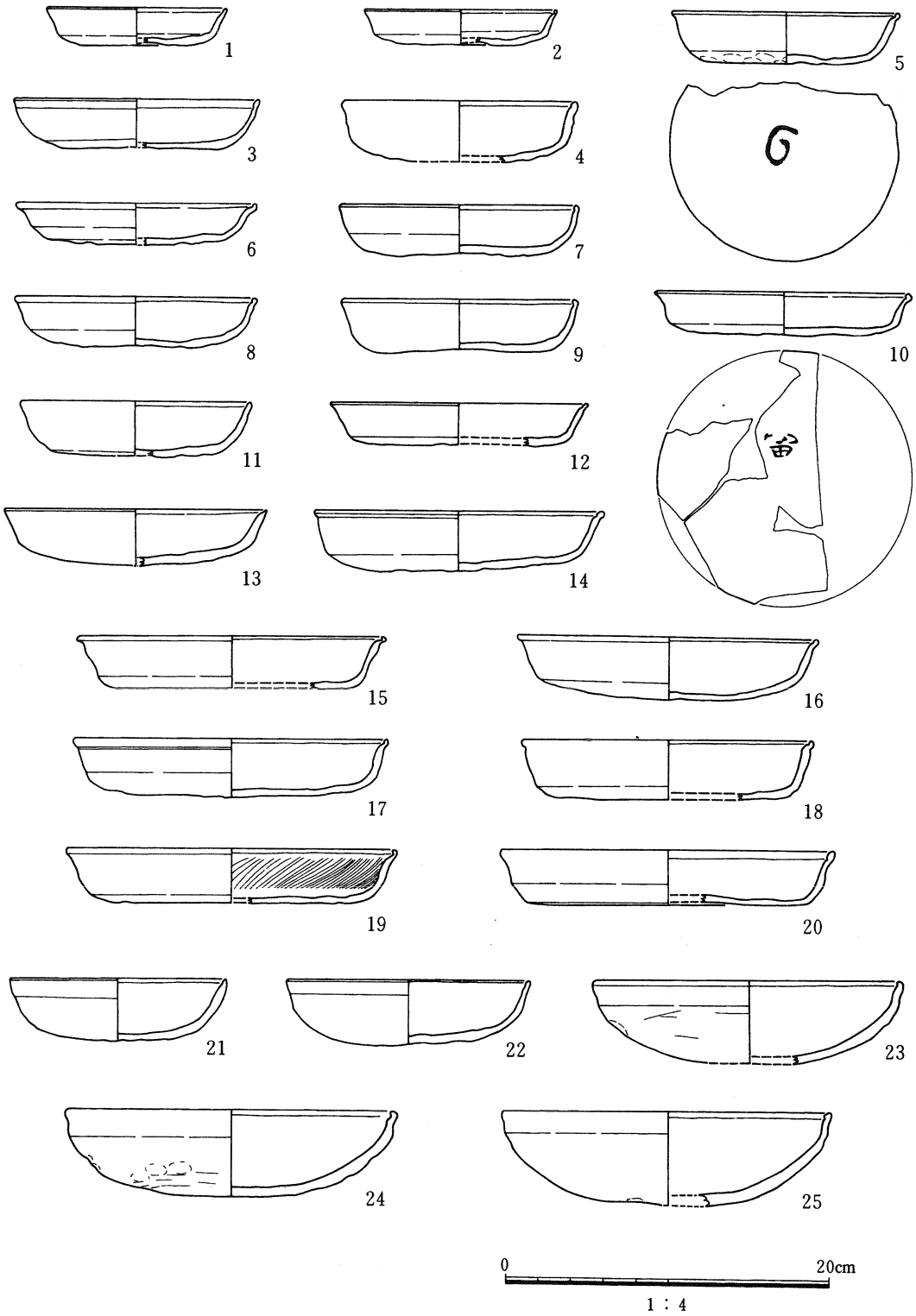


図 3　遺物実測図 (1)

東へむかって直線状にのびる。幅 2 ～ 2.3 m、深さ 0.7 m をはかり、断面の形状は逆台形～U字状である。埋土は 2 層認められ、上層が暗茶褐色土 (0.5 m)、下層が暗灰色粘質土 (0.2 m) となっていた。

土師器	器種	杯			皿		椀		鉢	高杯	壷	甕	鍋	その他	計
		A	B	蓋	A	B	A	C		A		A			
	固体数	20	0	0	14	0	2	4	0	1	0	5	0	0	46
須恵器	器種	杯			皿		椀		鉢	高杯	壷	平瓶	甕	その他	計
		A	B	蓋	A	B			B						
	固体数	2	3	5	1	0	0		1	0	1	1	1	0	15

表1　土器集計表

遺物は7～9世紀の土器類が大部分を占め、とくに上層の暗茶褐色土の下位部分では土師器・須恵器・製塩土器などがまとまって出土した。以下、その概要を器種ごとに述べる（図3～5、図版第16・17）。なお、各器種の分類等については、『古代の土器1　都城の土器集成』（古代の土器研究会編 1992）に準拠している。

土師器は総数46個体を数え、器種としては杯・皿・椀・鉢・高杯・甕等がある（表1）。杯は20個体あり、すべてA類である。口縁端部が肥厚するa形態をなすものとそのままおわるb形態がみられ、両者の比率は約3：1である。底部外面は成形後に雑なヘラケズリで調整するC手法を用いるものが多い。暗文は内面に粗い斜放射暗文が一段施されたものを一点確認したのみで、外面に施されたものはない。墨書は2点確認している。5の底部外面には「の」状の墨痕、10の底部外面には墨書が1文字記され、「富」もしくは「當」とみられる。

皿は6個体あり、すべてA類である。口縁端部の形状は大半がa形態となっている。外面の調整はC手法によるが、雑な調整なために指圧痕を各所にとどめている。暗文は3点に認められた。口縁部内面に斜放射暗文一段、底部に螺旋暗文が施されるが、いずれも粗雑なものである。外面に暗文は認められない。

椀は6個体あり、口径13～15cm程度の小形品のA類と20cm前後の大形品のC類とが認められる。椀Aは底部から内湾ぎみにたちあがる口縁部がつく。調整は粗いヘラケズリとナデを併用する。椀Cは底部からゆるやかに湾曲する口縁部がつづき、ヨコナデが比較的強く施されるために端部が湾曲ぎみとなる。外面調整はオサエ後にヘラケズリを施すが指圧痕を各所にとどめる雑なものとなっている。

高杯は1個体分確認したものの、脚部以下を欠く。杯部は斜め上方へむかってのび、端部は丸い。杯部内面には一段の斜放射暗文と螺旋暗文が施される。

甕は5個体ある。口径15cm前後の小形品と26cmの中形品にわかれ、完形品はない。外面の調整はタテハケ、内面はナデもしくはヨコハケである。45の頸部は強いナデによってわずかに屈曲する。

須恵器は総数15個体あり、杯・皿・鉢・壷・平瓶・甕等が認められる（表1）。

最も多く出土した杯は5個体を数える。A類とB類がある。杯A（46・47）は水平にのび

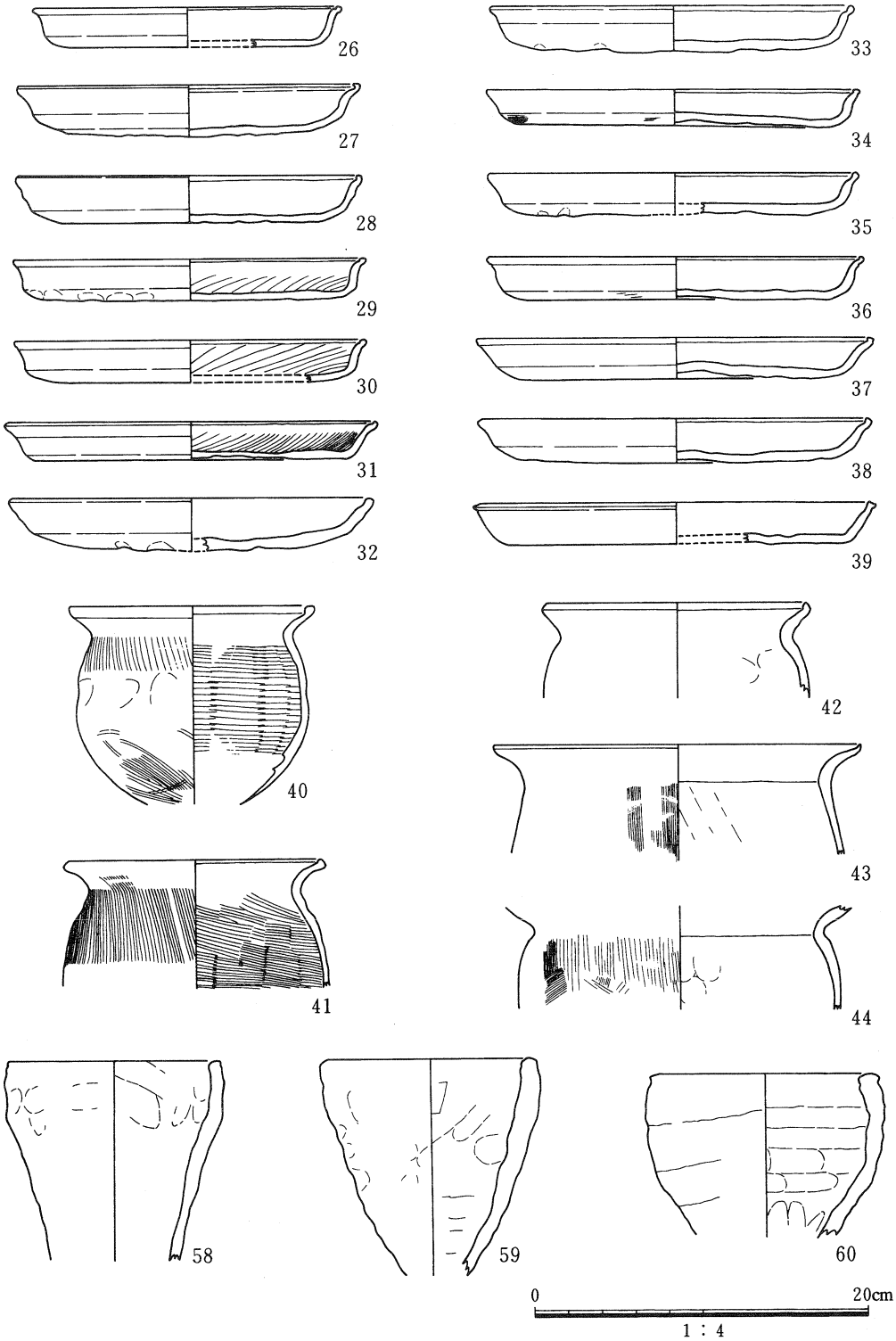


図 4　遺物実測図 (2)

る底部に外傾する口縁部がつく。高台がともなう杯B（53～55）は口縁部が内湾ぎみにたちあがり、端部は外反する。高台は底部外縁近くから外傾してのびる。接地面はほぼ水平である。杯B蓋（48～52）には天井部が丸みをおびる48と水平にのびる49～51がある。い

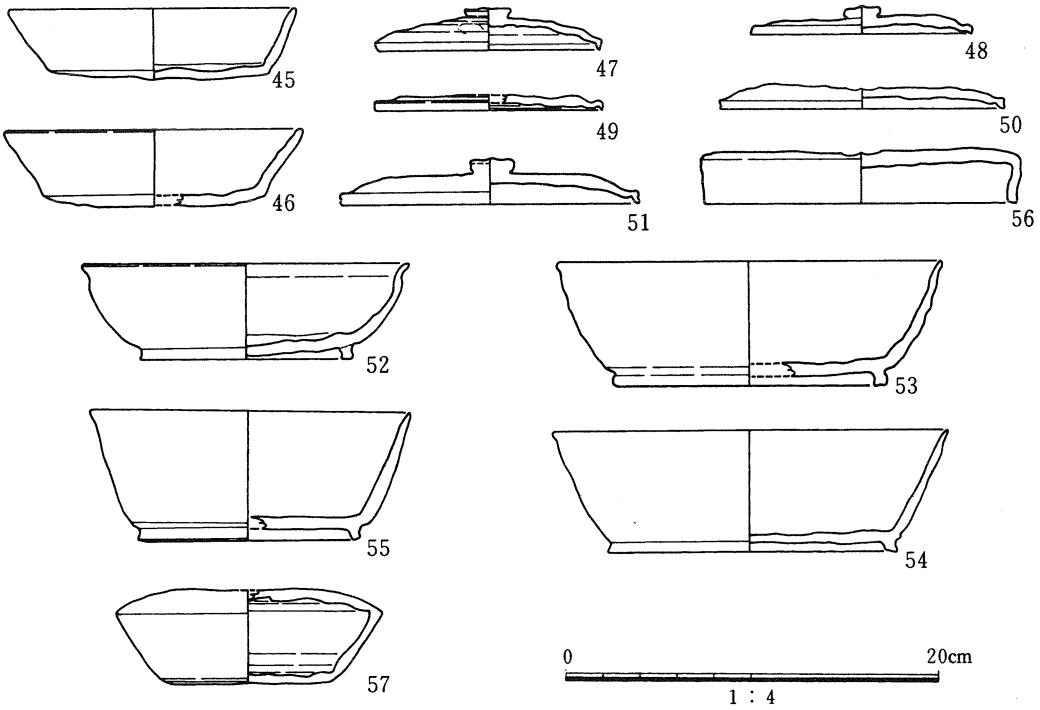


図 5　遺物実測図 (3)

ずれも低平なつまみがつく。

土師器・須恵器以外の遺物として、製塩土器があげられる。いずれも小片となった粗製品で軟質焼成である。調整は内外面ともナデである。形状は砲弾型であり、二次的に火熱を受けていた。

今回出土した土器のうち、土師器は46個体、須恵器が15個体を数える。出土総数61個体のうち、両者の比率はほぼ3：1となっている。器種別にみると杯・皿・椀などの供膳具が51個体（83.6%）と大部分をしめるのが特徴的である。土師器の供膳具類の調整手法をみると、大部分がヘラケズリを施すものの指圧痕をとどめる粗雑なものとなっている。

これらの特徴を示すものとしては8世紀末～9世紀初頭の一括品である郡家今城遺跡93—1地区井戸1上層出土資料がある。この資料は土師器供膳具の暗文やヘラミガキが省略されてしまい、調整手法もヘラケズリもしくはヨコナデのみと簡素化がすすんでいる。両者を比較すると、本例にはヨコナデのみおこなうe手法がみられないことや甕にタタキ目をとどめるものが存在しないことからすればこの資料よりも先行する時期と考えられる。

本市における古代の土器は平城宮Ⅲ期に相当する8世紀中頃より資料数が増加する傾向がみられるものの、まとまった個体数の出土例に乏しかった。このなかで本例は8世紀後半～末頃の状況をうかがい知るだけではなく、今後地域のなかでより細かな編年作業をおこなううえで重要な資料を提供したといえよう。

あとがき

平成10年度は81件の発掘調査をおこない、4遺跡の調査概要を掲載しました。このうち、高槻城三の丸跡の調査では、戦国時代末期の木棺墓群が棺に描かれた墨書の十字架からキリシタンの墓地であることが判明し、大きな話題となりました。そして棺の中からは宗教具であるロザリオも出土し、高山右近在城期の高槻におけるキリスト教信仰の実態にせまる貴重な成果を上げることができました。また、今城塚古墳では昨年に引き続き、第2次の規模確認調査を実施し、古墳の規模や築城の様子などついて新たな知見を得ることができました。今城塚古墳については将来の整備事業を見据えて継続的な確認調査をおこなっていく予定です。

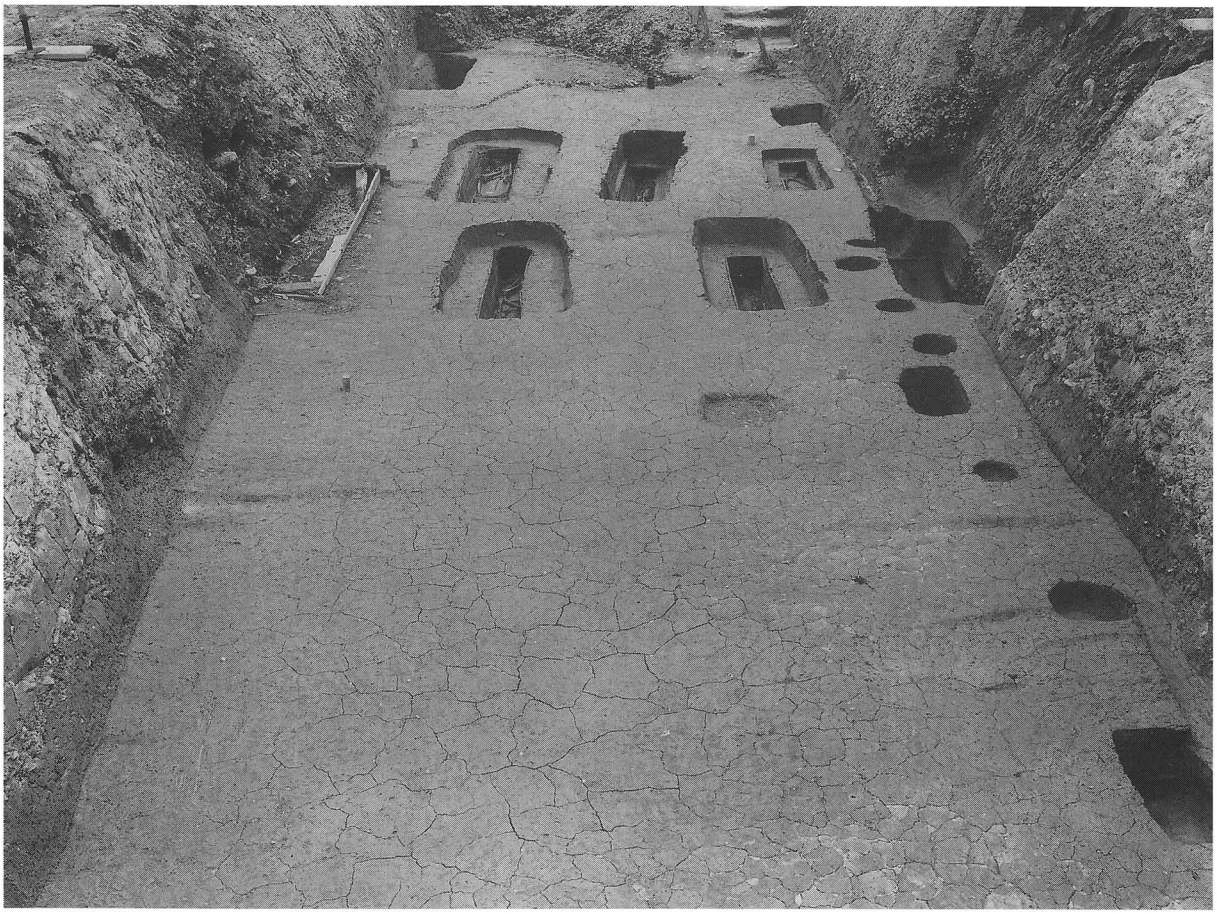
一方、文化財保護啓発事業としておこなった各種のイベントに今年も多数の市民の参加を得ることができ、毎回のことながら文化財に対する関心の高さを認識することができました。こうした市民の文化財行政に対する期待に応えるため、平成9年に5枚の青銅鏡が出土した安満宮山古墳の復元整備事業をおこない、平成10年12月から一般に公開しています。築造当時の形状に復元した墳丘上では、眼下に弥生時代の拠点集落である安満遺跡や南流する淀川はもとより、遠く生駒山まで見渡すことができ、憩いの場としてあるいは歴史と親しむ空間として多くの市民の方に訪れていただきたいと思います。

(K.T)

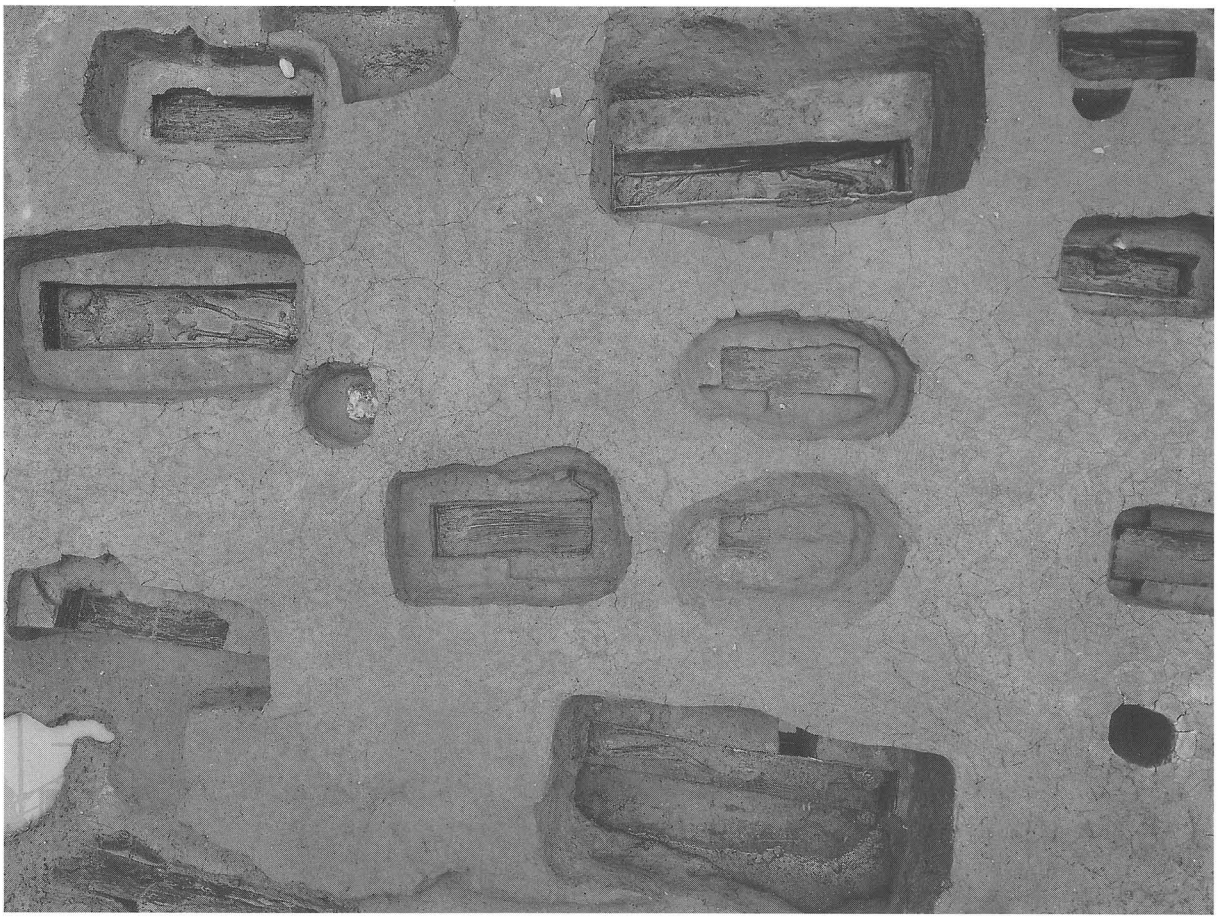
図　　版

図版第1

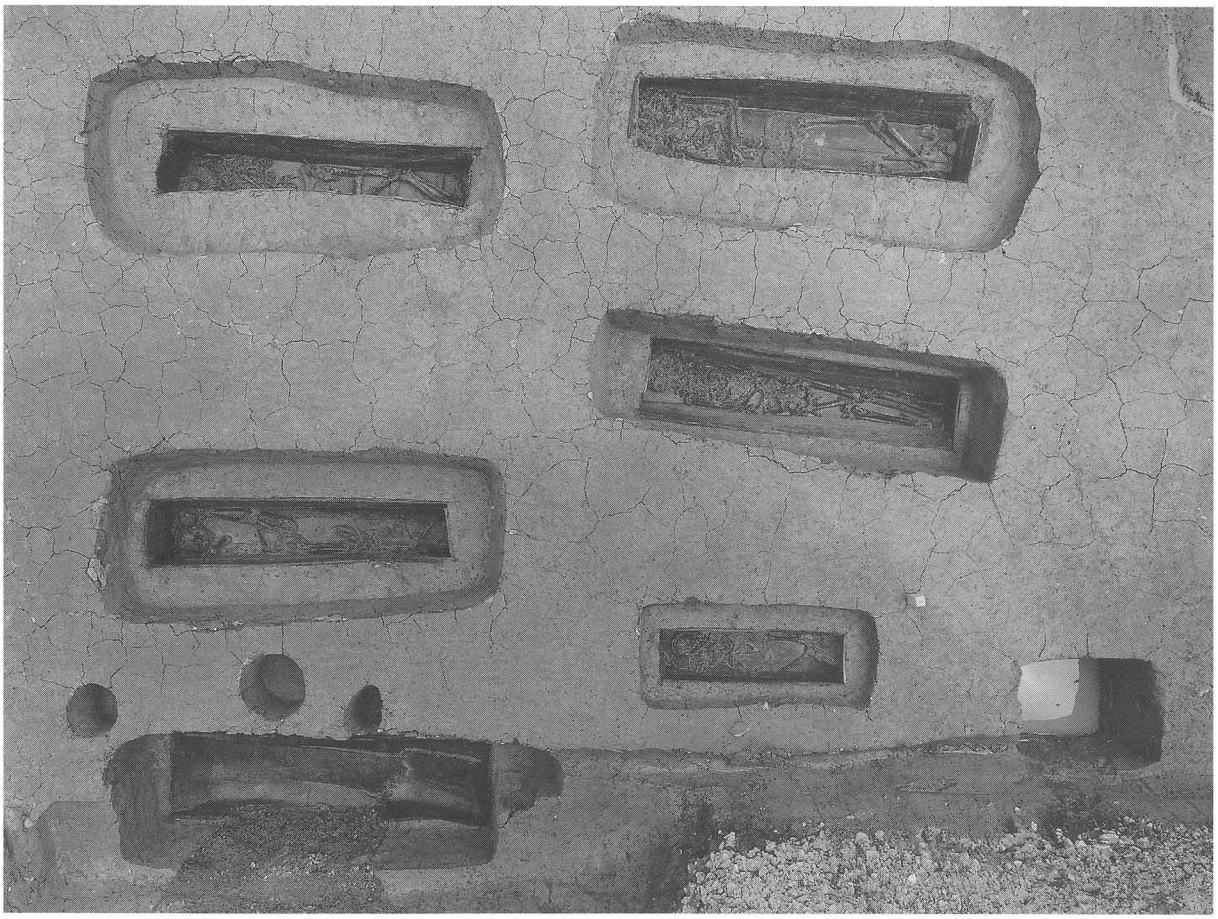
a．高槻城三の丸キリシタン墓　A区　北群（南側から）



b．高槻城三の丸キリシタン墓　A区　通路（手前）と南群（北側から）



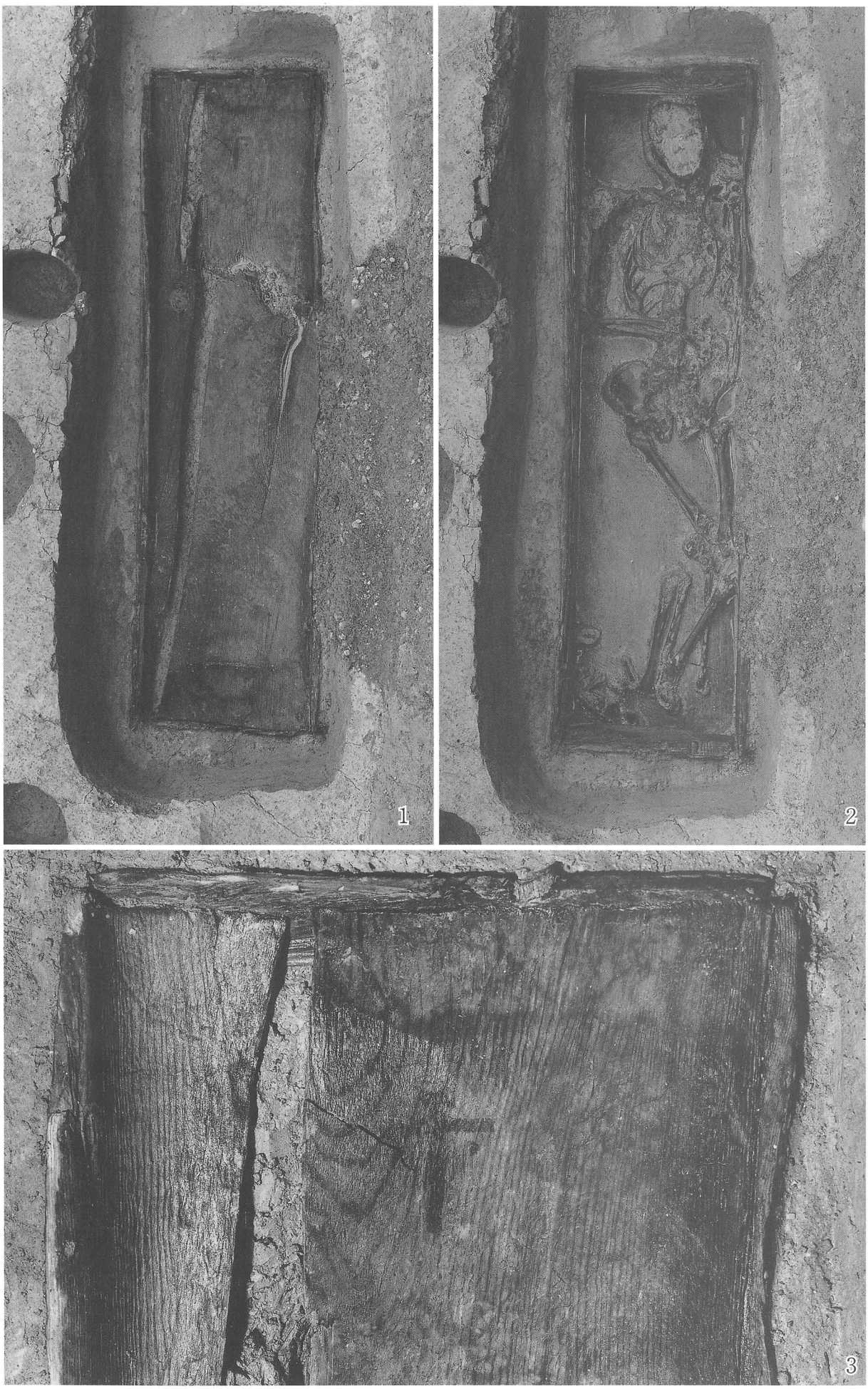
a．高槻城三の丸キリシタン墓　A区　北群（左が北）



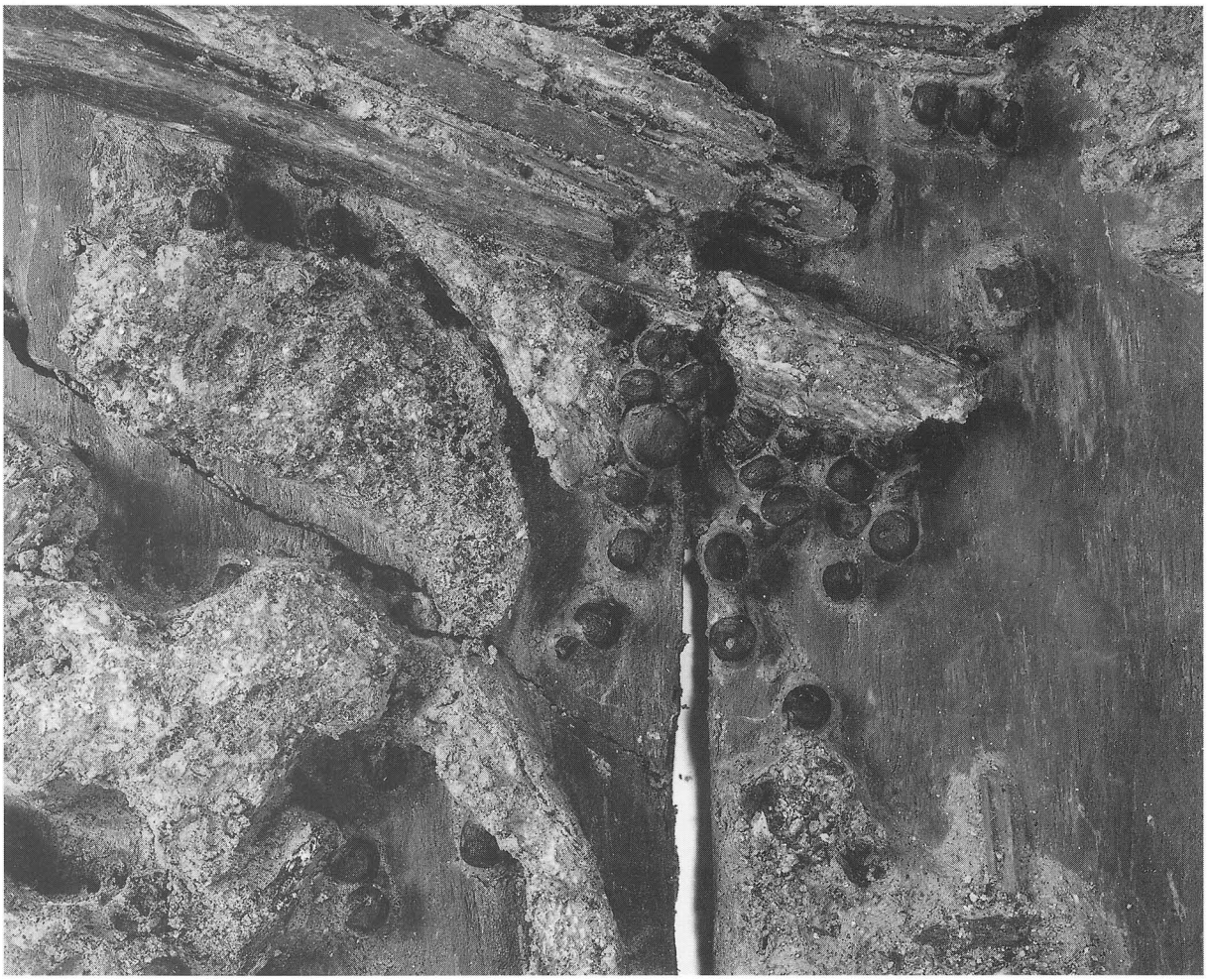
b．高槻城三の丸キリシタン墓　A区　南群（左が北）

a．高槻城三の丸　キリシタン墓　B区　東半部（西南側から）

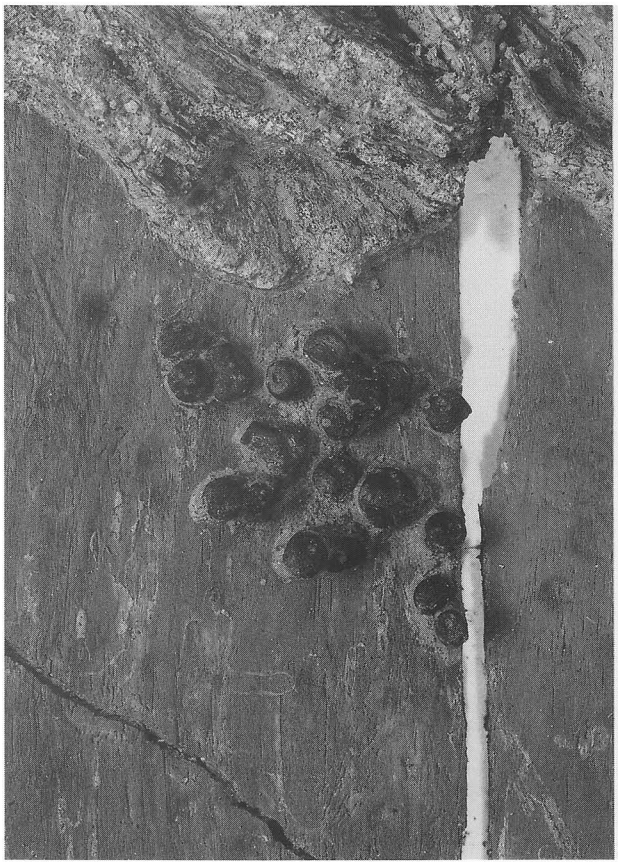
b．高槻城三の丸　キリシタン墓　B区　区画溝（西南側から）



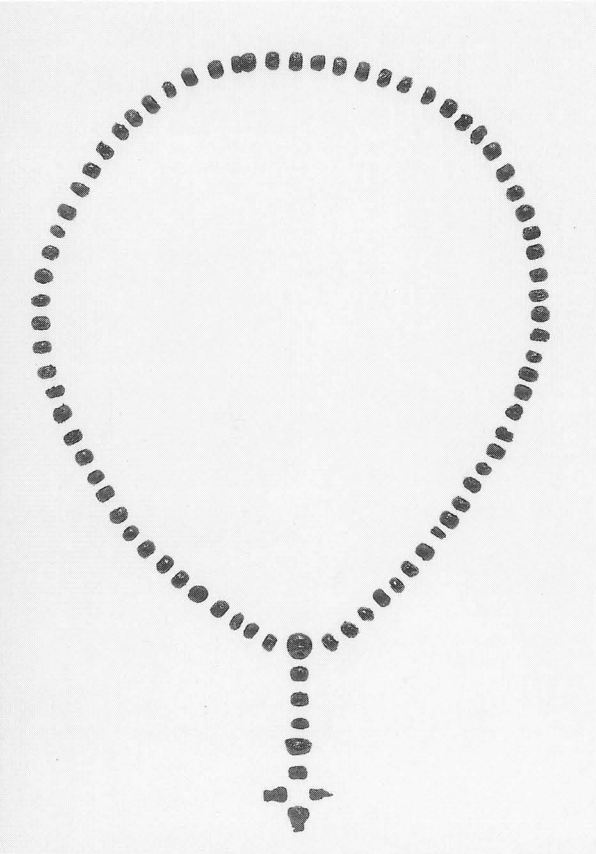
高槻城三の丸キリシタン墓　11号木棺
検出状況：1　人骨検出状況：2　棺蓋に描かれた二支十字：3



a．高槻城三の丸キリシタン墓　10号木棺ロザリオ出土状況（上層、上が頭位）



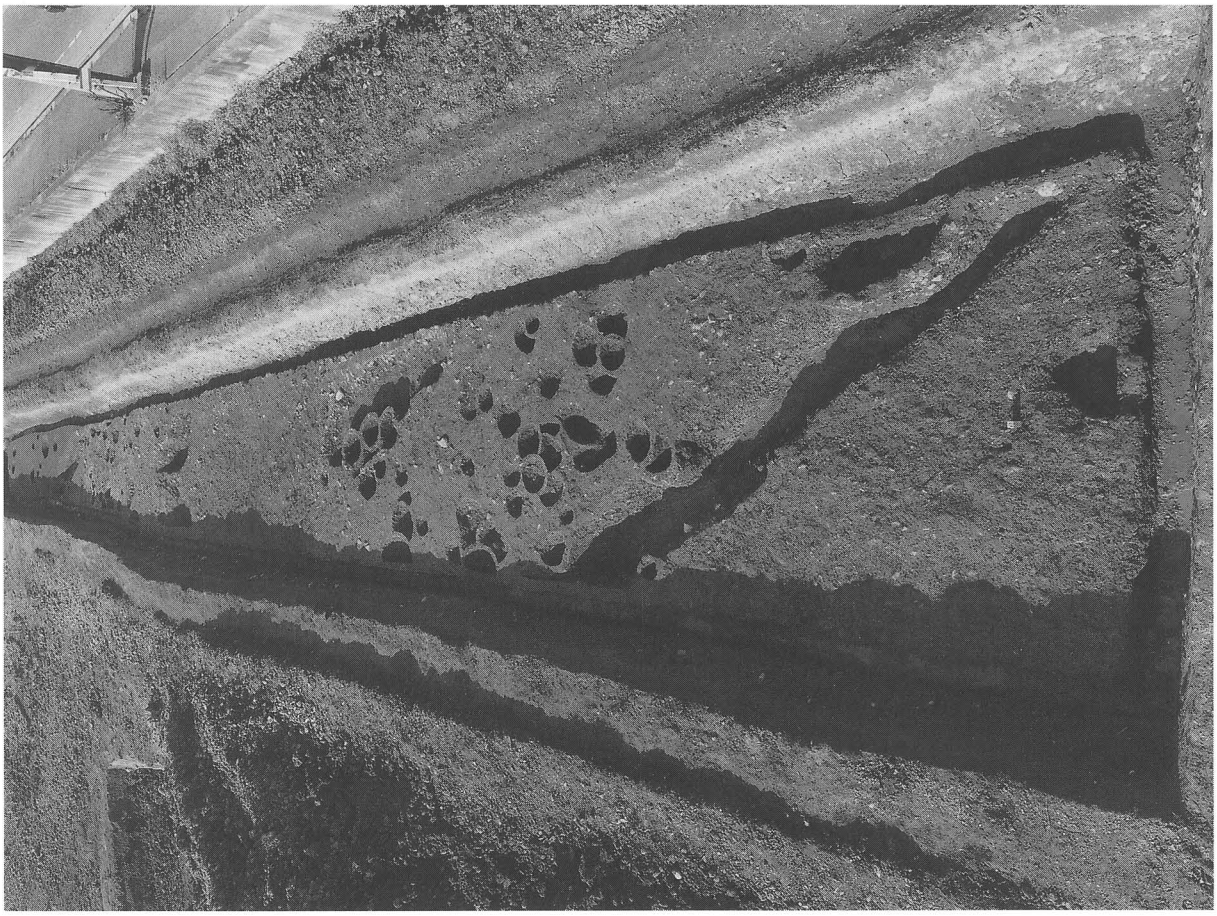
b．10号木棺ロザリオ出土状況（下層）



c．ロザリオの復元

a．嶋上群衙跡（23－Ｄ地区他）　Ａ調査区全景（東側から）

b．嶋上群衙跡（23－Ｄ地区他）　Ｂ調査区全景（北側から）



a．嶋上群衙跡（23－D地区他）　C調査区全景（東側から）

b．嶋上群衙跡（23－D地区他）　D調査区全景（東側から）

a．嶋上群衙跡（23－D地区他）　井戸１（南側から）

b．嶋上群衙跡（23－D地区他）　ピット１　遺物出土状況（北側から）

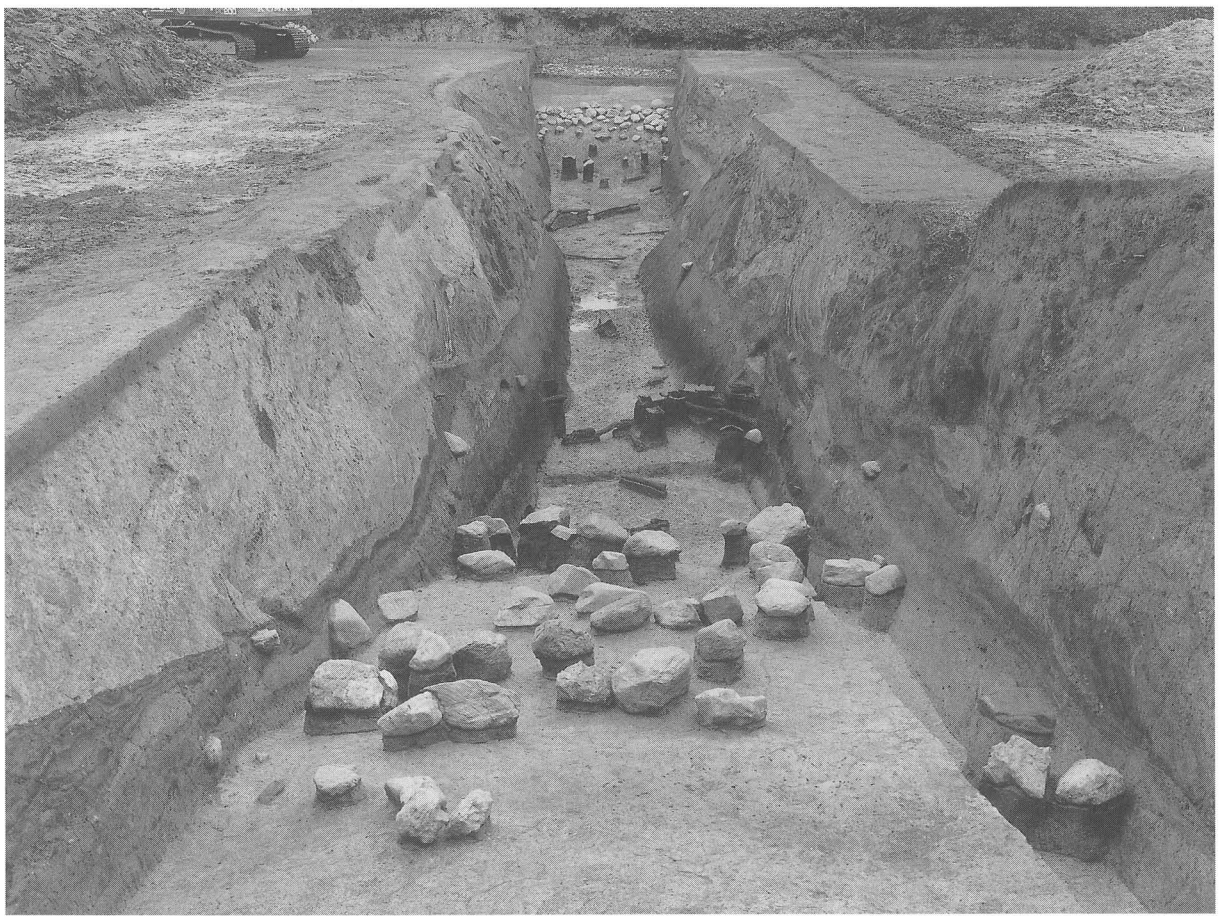
a．津之江南遺跡（98－C地区）　全景（東側から）

b．津之江南遺跡（98－C地区）　全景（西側から）

a．津之江南遺跡（98－C地区）　掘立柱建物群（南側から）

b．津之江南遺跡（98－C地区）　井戸1（南側から）

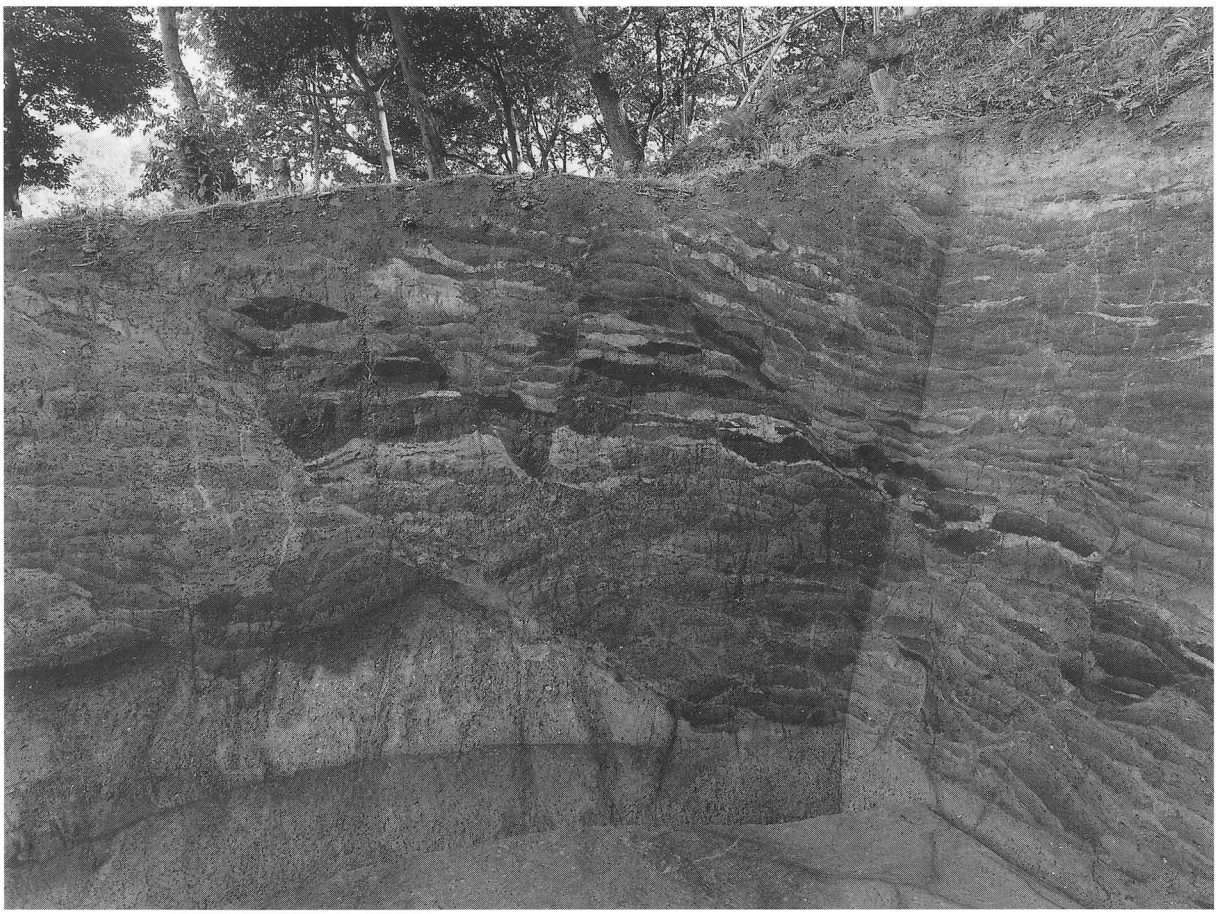
a．今城塚古墳第２次規模確認調査　全景（北西側から）



b．今城塚古墳第２次規模確認調査　墳丘側からみた内濠（西南側から）

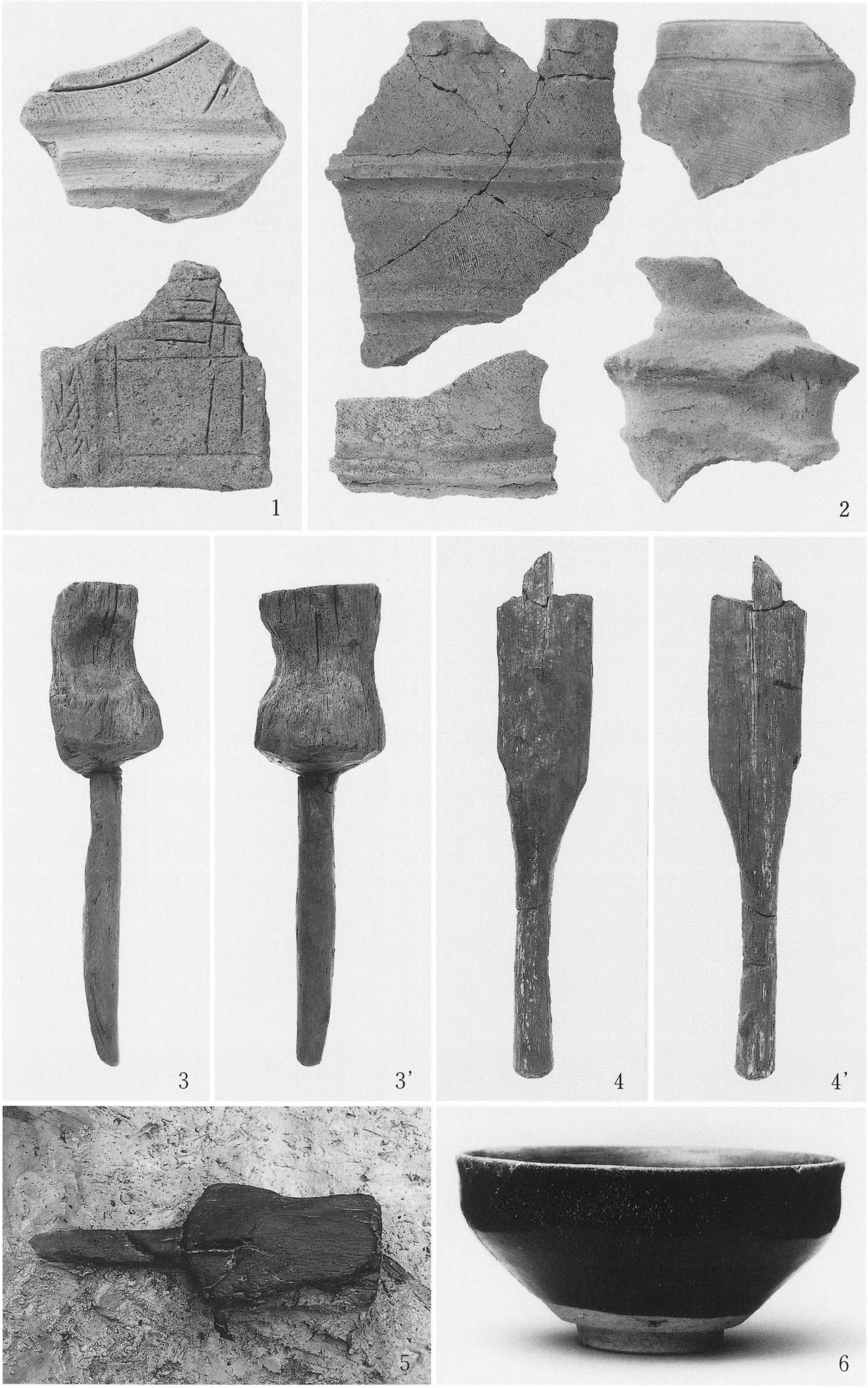
a．今城塚古墳第２次規模確認調査　後円部（墳丘）斜面検出状況（北側から）

b．今城塚古墳第２次規模確認調査　内堤斜面検出状況（西側から）

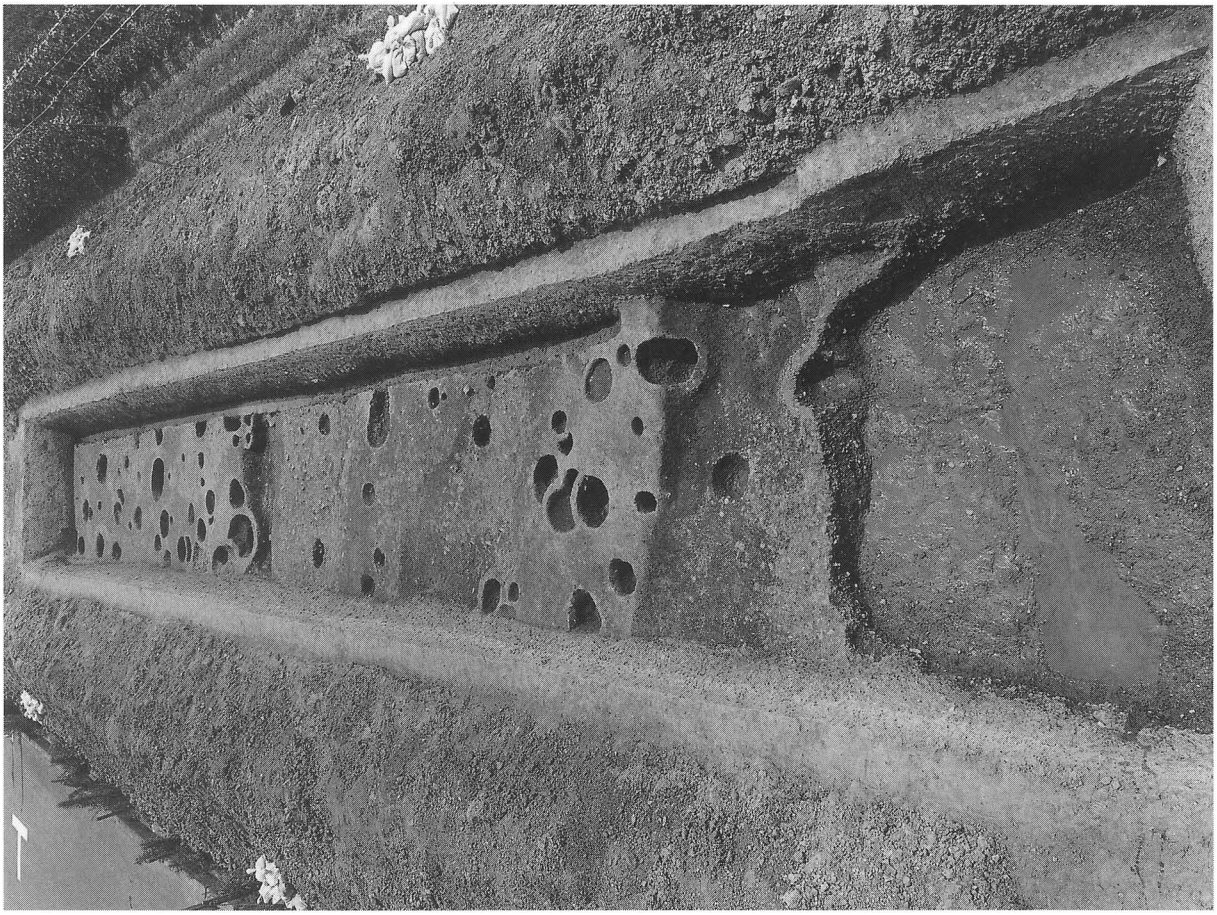


a．今城塚古墳第２次規模確認調査　墳丘上の巨大ブロック土

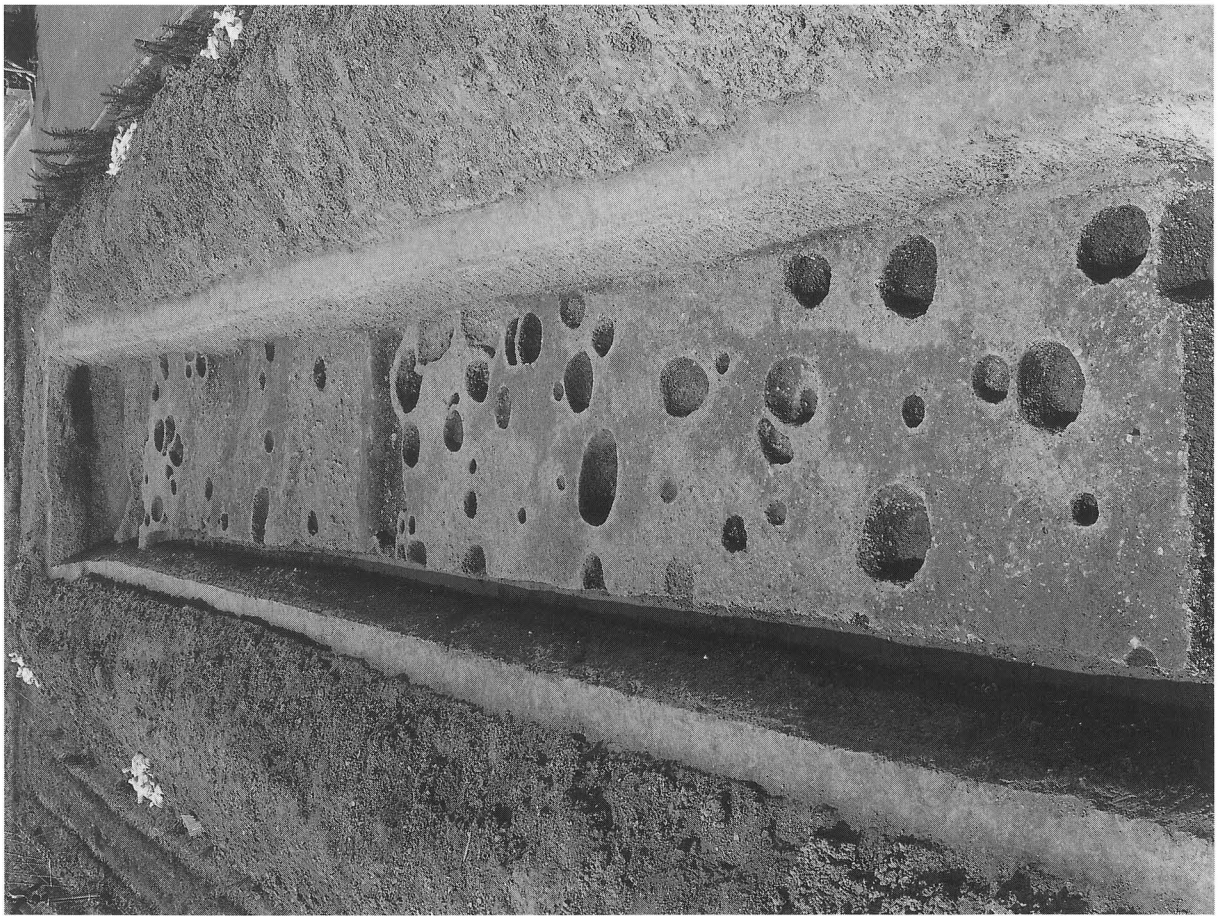
b．今城塚古墳第２次規模確認調査　内濠を埋めている巨大ブロック土



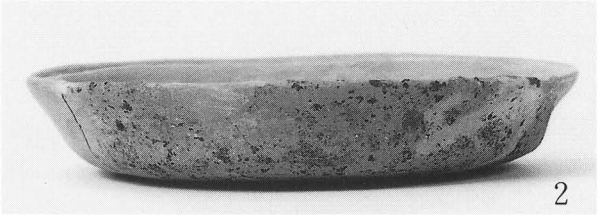
今城塚古墳第２次規模確認調査　出土遺物　埴輪１（約1/2）・２（約1/4）
掛矢３（約1/6）　櫂状木製品４（約1/5）　掛矢出土状況５　天目茶椀６



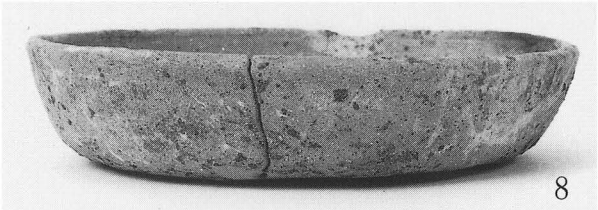
a．安満遺跡（98－D地区）　全景（北側から）

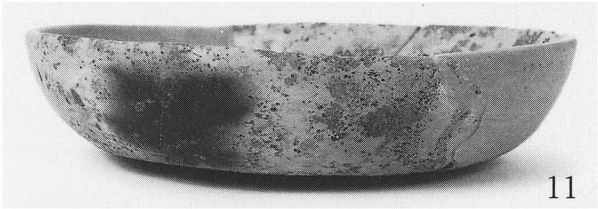


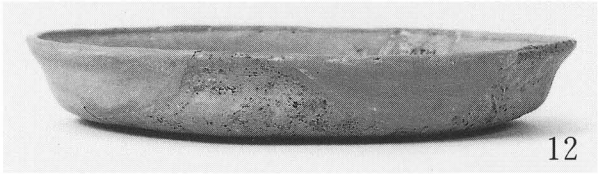
b．安満遺跡（98－D地区）　全景（南側から）

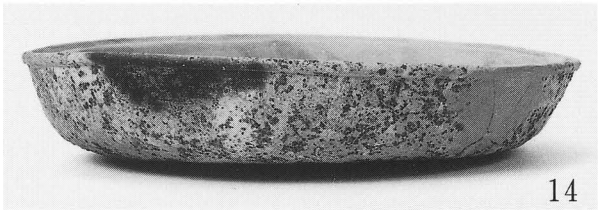

2

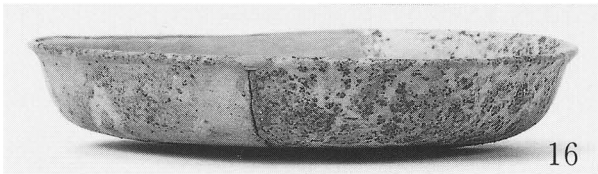
7

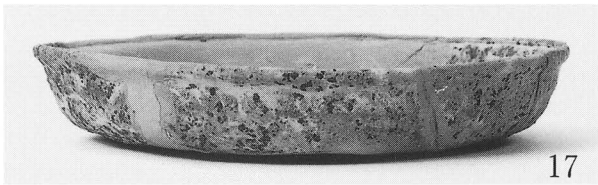

8

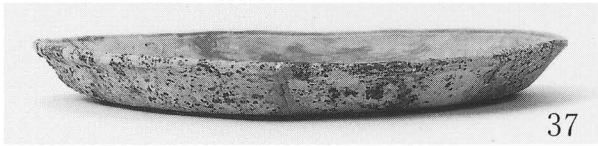

11

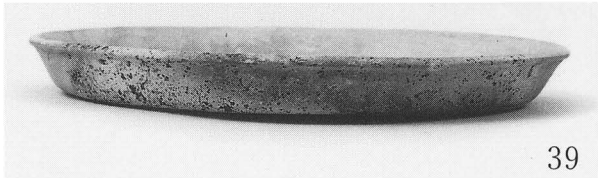

12

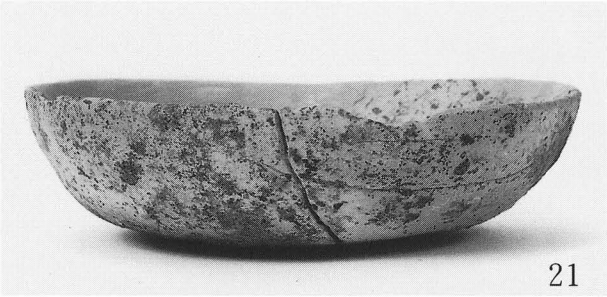

14


16


17

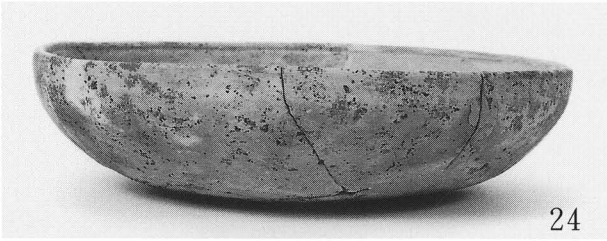

37


39


21

22

23


24

25

40

安満遺跡（98－B地区）　溝1出土土器